

# 菅原傳授手習鑑

竹田出雲作

浮詞蒼々たる姑射の松化して締約の美人と顯はれ。珊瑚たる羅浮山の梅。夢に清麗の佳人となる。皆これ擬議して變化をなす。豈誠の木精ならんや。唐土ばかりか日の本にも人を以て名付くるに。松と呼び。梅といひ。或は櫻に准ふれば花にも情天満つる。大自在天神の御自愛ありし御神詠。オロシヘ末世に傳へて。有難し。神神いまだ人臣にまします時。菅原の道真と申し奉り。文學に達し筆道の奥儀を極め給へば。才學智徳兼備はり右大臣に推任あり。權威にはびこる左大臣。藤原の時平に座を列ね。菅丞相と敬はれ。君を守護し奉らる。フシ延喜の。御代多豐なる。雖然るに主上この程より。御風の

心地とて病の床に臥し給ふ。天顔を伺ひ奉らんと。御弟宮無品齋世親王。參内の御共には院の廳の官人。判官代顯國。フシ階下に。伺候仕れば。地席を正して丞相に打向はせ給ひ。當今朝廷參致せし所法皇仰せある様は。當今の御惱日を追つて快然ならず。急ぎ齋世に參内し龍顏を拜し御様子。ありの儘に告知らせよと判官代を相添へらる。御容舛いかゞ渡らせ給ふやらん。地菅丞相正勿あり。詞さして御變りもなく候。委しくは道真に御尋ねあらんよりは。直に天機を伺ひ給へ然らば左様に致さんと。時平にも挨拶ありオクリ常衣殿に入り給ふ。地かゝる所へ式部省の下司。春藤玄番。尤友景罷出で庭

上に頭を下げ。詞今度海國より來朝せし唐僧天蘭敬が願ひには。唐土の徽宗皇帝。當今の聖徳を傳へ聞き。何卒天顔を拜し奉り。御姿を畫に寫し歸國せよ。その畫を則ち日本の帝と思ひ對面せんと望みにつき。數々の饋物。地則ちこれに候と庭上に。フシ飾らすれば。地菅丞相聞き給ひ。詞コハ珍らかなる唐僧が願ひ。當今延喜の帝。聖王にたまします事隠れなく。御姿を拜せんと唐の帝の望みは。直にわが國の誓なれども。地折悪しき天子の御惱ありの儘に云聞かせ。音物も唐僧も唐土へ歸されんや。時平の了簡ましますかと仰せに冠打振つて。詞さうでない道真。御病氣と申し聞かしてもよも實には思ふまじ。延喜の帝は聖王でも。跋か瞎か缺唇か蹇か。天皇らしうない形政。病氣といふは間に合ひといはる。は日本の疵。面倒な事はさんより。御形代を

拵へ天皇と偽つて。唐僧に拜さすれば何事なる事は済む。誰彼といはんよりこの時平が代りを勤め。地袞龍の御衣を着し。天子になつて對面せんと一口に言ひ放す。フシ謀叛の兆ぞ恐ろしき。地判官代輝國階の下につつと寄り。詞こと新しき嚴命。唐土の天蘭敬は。時平公の御姿を寫しには參るまじ。皆上つて。頤廣く。頬骨高き延喜の帝。唐僧がよも吞込むまい。神武以來ひとりの惡王。武烈天皇の名代ならば時平公が最究竟。地當今の御代りとは鹿を馬との出そこない。ハハハ、御無用と嘲笑ふ。詞ヤア舌長し輝國退去れやつと呵りつけ。ヤアく玄番。天蘭敬を内裏へ伴へ。地天子にはこの時平用意せんと立つ所を。菅丞相とどめ給ひ。詞時平の仰せは天下のため御形代とはさる事なれども。もしはかの僧相人にて。君臣の相をよく見るならば。王孫

にあらぬ臣下と知るべし。地其時いかゞ仕らんと。理窟に時平行常れば三善の清行進み出で。詞菅丞相の詞とも覺えず。かの坊主を相人とは。あんまりな先づり念に念が入過ぎる。左中辨希世殿さうぢやないかと差出口。イヤこれ念に念を入れてさへ過ち仕落ちはあるならひ。假初ならぬ唐土人御對面の事なれば。地輕々しく計らはれずと。フシ暫しが間御思案あり。詞所詮天子の御かはり人臣はなりがたし。幸ひ御同腹の御弟宮。齋世の親王を今日一日天子と仰ぎ。御姿畫を唐土まで傳へて恥じぬ御粧ひ。此儀いかゞと理にかなふ。詞に違ふ時平が謀計目と目と三善の清行も。フシ口あんごりと聞き居たる。ハルツ玉簾深き。一間より。伊豫の内侍立出で給ひ。詞兩臣の御諍ひ我が君委しく聞召され。朕が代りは齋世の宮と直々の勅諭にて。地只今御衣を召替へ

給ふ。此由申し傳へよとの仰せにて候とフシ内侍は奥に入り給ふ。地時平は俄にむつと輝國が悦喜の眉ひらく扉は目花門。玄番尤が案内にて。渤海國の僧天蘭敬。倭朝にかはる衣の衫。フシ庭に覆ひて畏まる。詞ム、唐土の僧天蘭敬とは汝よな。龍顏を寫し奉らんとの願ひ。叶ふは汝が身の大慶有難く存じ奉れと。地時平が指圖に警蹕の聲諸共に高々と。御簾卷上ぐる其内には。弟宮齋世の親王金巾子の冠を正し。御衣さわやかに見え給ふ實に王孫のしるしとて。唐僧はじめ座列の官人フシあつと。平伏し敬へり。地天蘭敬やうく頭を上げ。玉體をつくぐくと拜し奉り。詞ハ、ア天晴聖主候や。我が國の徽宗皇帝慕はるゝも理なり。地三十二相備はつていはん方なき御形。詞勿體なくも僕が筆に寫し奉らんと。ハルツ用意の畫絹親箱。檜木燒筆さらくと。肩

のかゝり顔際見ては寫し。ホオクリ書いては拜し。御笏みしやくの持たせやう御衣みいの召ぶり違ひなく。即席書すまじの速かさ顔輝かほが子孫かたじけなく。フシ畫筆えびすの妙を顯はせり。地判官代は羞心得捧物取納たてまむれば。重ねて俵祿賜びてんぞ旅館りやうかんに歸れと道眞の。下知を請繼うけつぎぐ春藤はるふじ支番しばん。お暇申させ唐僧てんじやうをオクリ伴ひてこそ退出す。地歸るを待つて時平大臣玉座よしみざに駈け寄り。齋世さいせいの宮の肩先かた掴んで引摺り出し。御衣みいも冠かんむりもかなぐり。唐人が歸つたれば暫くも着せては置かれぬ。九位くゐでもない無位無官むゐむくわんに。着せた裝束まゐらひこの冠かんむり穢きたれた同然どうぜん。内裏うちに置かず我が預かる。今日の次第しだいは右大臣みぎのちじん奏聞そうもんせられよ身は退出。地罷り歸ると御衣冠奪取みいかんずつつて行かんとす。道眞立つて引取り給ひ。調聊爾てうりやうになり時平。勅ちくもなき御衣冠みいかん私わたくしに持歸り。過つて謀叛ぼうはんの名を取り給ふやと。地何心なく身の爲をいは

るゝ身には胸に釘。フシ頭ゆがめて閉口す。地齋世さいせいの宮みや管丞相くわんじやうに向はせ給ひ。調天てうてん子序しじょの勅諭ちくよんには。老少不定せうしやうふてい極たぎりなし。何時いつししらぬ世の中に名ばかり残すは其身みの爲。道を殘すは末世まごよの爲。妙を得たる筆ふでの道傳みちでんふべき總領そうりやうは女子むすめなれば是非せひに及ばず。稚わかければ弟あにの首秀くびひで才さいにも傳ふまじ。弟子でし數多かずある管丞相くわんじやう器量きりやうを擇みて。地筆道の奥儀おくぎを授け長き世の。寶たからとせよとの御事ごじと。仰せの中に左中辨宮さちゆうべんみやうの前へすつと出で。管丞相くわんじやうの弟子でしのうち位ゐといひ器用きりよくといひ。希世きよせいに上越あがす手書てがみはなし。地幸さいひ是こゝにて傳授でんじゆあれと。御申付け下さるべしと言はせも敢ず。管丞相くわんじやうにつこと打笑うちわらみ。調内裏うちにある時は我が傍輩ぼうばい。筆法ひつぽうは我が弟子でしなれば。此道このみちにおいて師匠しせうを差置き。我儘わがままの願ねがひ致いたされなど。地誠まことの詞ことば巖いわ々と襟えりを繕つくろひ勅答ちくたうには。詞有ことば難たがき君きみの恵めぐみみ。我が筆法ひつぽうの大事だいじには。神代かみよの文字もじ

を傳ふる故七日ななかの齋さい七座しちざの幣へい。神道かみち加持かぢに唐倭たうわ。文字もじは何萬なんま何千なんせんにも。地我が筆道ひつだうに。フシ洩あらしはなし。調それとも知らず此處こゝかしこに手習てならふ子供こどもも皆みな我が弟子でし。調今日けふより私宅わたくしに閉籠とこり。擇出えら出して器量きりやうの弟子でしに。筆傳ひつでん授け申すべしと。地宜よろふ詞ことばは今の世に傳へて殘る筆道ひつだうの。道は御名ごなに顯あらはれて。眞まことなるかな誠まことなる君が。御代ごよこそ大おほ三さん栗り豐ゆたかなれ。地引捨ひきすてつるへルフシ車くるまは松まつに輪わを休やすめ。フシ舍人しやにん二人ふたりは肘枕ひじまくら。地二輛ふたご並ならべし御所車ごしよくるまかたへは藤原ふじうらかたへは菅原くさわら。道眞公みちまことの名代なごしろは左中辨さちゆうべん希世きよせい。時平公ときへいの代參しろは三善さんぜんの清行きよぎやう。加茂明神かものあきみかみへ御願ごねがひの祈願いのり。神子かみこが湯立ゆたての共間眠ともまどるむまさは加茂堤かものづつみ。フシ夢ゆめに夢ゆめをや結むすぶらん。地松吹まつふきく風かぜに菅原くさわらの舍人しやにん。梅王丸うめおうまる目を覺さし。調コリヤやい松王丸まつおうまる。そちが主ぬしの時平公ときへいは短氣たんき者ものでも根ねが大烏おほい。名代なごしろにわたせた清行殿きよぎやうどのは短みづかいくせに根ねが悪わる者もの。

呼び使を請けぬ目を覺して往かいでな。ホウ梅王のいはるゝ事わいの。こなたの主の名代に來た希世殿こそ大邪人。夢喰ふ虫もすきぐとあの和郎を弟子にしたり。代參におこしたりなさるゝ。菅丞相のお心が知りたい。イヤそりや其方達が小さい簡とは違ふ。聖人の胸の廣さは。此方等が身にも覺えのある事。齋世の宮様の車を挽く。櫻丸と汝とおれと三人は。世に稀な三つ子。顔と心はかはずとも着物は三人一緒。ひよんな者産んだと親父が氣の毒に思うたをお聞きなされ。三つ子は天下泰平の相。舍人にすれば天子の守りとなる。成人さして牛飼に差上げよと。菅丞相様のお執成で御扶持まで下され。親四郎九郎殿は今佐太村の御領分に。御寵愛の梅櫻松を預り。安樂に暮して居らるゝ。其御寵愛の三木の名を我々にお付けなされ。おれを見のお心でか梅王丸

とお呼びなされて召使はる。其方は松王丸櫻丸は宮の舍人。烏帽子親といふ御恩のお方。地家を隔てて奉公するとも。必ず徒疎かに思はぬがよいぞよ。調ア、ぐどくくく長談義説く人。もう齋世の宮もお参りなされ。牛休めに櫻丸も來さうなもの。何ぞ用があるか。ハテ佐太村の親父殿から。來月は七十の賀を祝ふ程に。三女夫連で來いと人おこされた。其事はうと思つて。ソリヤ銘々に人が來てよう知つてゐる。思へば親父殿は負はず借らずに子三人と。地果報な人ではあるわいなアと。フシ兄弟咄の其中へ。同じ胤腹一時に生れて年も同年。どれが兒とも弟とも梅と松とに櫻丸。三幅對の車ひき小陰に一輛引捨てて。堤の上からははく。調二人ともゆつくりとして居らるゝ。御神事も早や半過ぎ。呼立てられぬうちに往たらよかと。地眞顔でい

へば梅王丸。調御神事が済んだら宮様からお立であろが。其方や又爰へ何しにきた。イヤ此方の宮様は神司の方で。御休息ある故お立の程がしれぬ。此方衆の乗せて來た御名代の衆は。禁廷の御用があるとして立騒いで居たぞや。地油斷して呵られまいといふに松王いか様。調役なしの宮様と時平公のお眼鑑で。御用繁き清行様とは違ふ。何時知れぬいざ往くと。地車にかゝればヤレ待て松王。調清行様がお立あれば。此梅王がお供した希世の卿も同然。萬一お立でない時は。あの大勢の群集の中へ二輛の車を引きかけて。怪我さしても損ねても。不調法は舍人の誤り。地一走り往て様子を見て取りに歸る迄の事。休んだ代りぢやサア來いと。引連れ立つて兩人は、フシ宮居の方へ走り行く。地跡見送りて櫻丸。調ハ、一ばい食うて往たわく。地獨言して

相圖の手拍手。招けば招かれ戀草の。露踏分けて十五六。フシ被の風の。やさしきは。音承相の御娘。エテ刈屋姫とて色も小オクリ香も文は。父御のお家柄。長地口説き落して宮様に逢せませんと跡につく供は八重とて花めきし。櫻丸が自慢の女房先へ廻りてコレこちのお人。首尾はよいかと問へば點頭き。詞よいともし。今日此加茂堤はお車の休所。人どめして一人も通さぬ鼠の子もない所と思ひ。宮様をそびき出して來た所に。梅王丸や松王がどんぐり目玉にほつと草臥れ。一生につかぬ嘘をまた吐いてまんまと散らして仕まつた。地姫君様耻しさうな顔せずともお出で。詞ドリヤ開帳仕らうと。地車の御簾を引上げれば。齋世の宮は面はゆげに。姫は猶しも顔見合せ。フシにつと笑うて袖覆ふ。詞サアこゝらが下々と違うて。飛付かして輕業もさせにくい。

女房ども。暗闇にしたいなア。何のいな晝ちやとて結構な車の内。エ、すばやい奴ではあるぞ。地我等は暫しお暇と。フシ木蔭へはいればそれ。こんな時には男は邪魔。サお姫様。申上げたい事あらば遠慮なしにおつしやれと。突き遣らればとの御すさみ有難いやら嬉しいやら今日の此首尾待兼ねて。お呵り受けに参りしとフシ袂くはへて宜へば。齋世の宮も十七のいとまだ若き初戀に。何と言寄る品もなう。詞櫻丸がいかい世話。文見る度にいやすまり逢ひたかつたようこそ。地噺春風で寒かると。仰せは姫の身にこたへ春風よりも戀風がフシぞつと身にしむばかりなり。地車の陰より櫻丸ぬつと首出しコリヤ女房。詞我が身抓つて人の痛さ。おりや先刻にから死脉が打つ。地早う配劑しをらぬかとせり立

てられてヲそれ。春風でお寒いとおつしやる。憚りながら御車を暫しの内の風凌ぎ。御免ありてと姫君を。無理に抱上げ押入るれば。詞アコレは何しやる。地勿體ないと云ひつゝも車の内へ入り給へば。羞心得て櫻丸フシさらば開帳と御簾おろす。地内には宮の御聲にて嬉しいぞやとのお詞と。詞神話の御車で罰が當ろとシヤ儘よの地陸言聞いて夫婦は飛退き。詞女房ども。たまらぬ。隣り殿しうてひよんな地寶を儲けたとフシ身もだえすれば。詞ヲこれ聞えるわいの。お二人共に御機嫌よう嬉しい事ではごんせんか。イヤもうあんまり御機嫌がよ過ぎて近所まで帷儀がかまつた。とはいふもの有様はそちが働き。ようママ尋ね逢うたな。こなさんの教の通り内裏上臈の形にやつし。社家の内へすつといて姫君のお傍へ通り。櫻丸が女房八重でこ

ざりますると申上げたれば、彼方にも待乗ねてござつたかして。ようおぢやつたもういこかと。腰元衆を待たして置いて裏道から忍んでお出。ヲ、其苦其苦。此中から手稱して。菅丞相様の筆法傳授に取籠つてござるを幸ひ。お袋様へ神参りと願はせ。お供の衆には白薬水撒くやうに飲まして置いた。ヤ其水で思ひ出した。追付お手洗水がいろぞよ。何いはんすやら。あのおぼこなお二人。うまいやつではある。手洗は愚かお行水がいろも知れぬ。そんならつい此川水をア、イヤコリヤ。雨あがりて堤が滑る。怪我さしては晩から俺が不自由な。神前の水汲んで来い。ソリヤまあどうやら勿弊ない大事な〜。王は十善神は九善。其王様の弟御九善半ぢや往て来いと。せり立てられて女房はオシリ神前へさして波みに行く。跡は氣休め一休みと思ふ

所へ三善の滑行。官人仕丁に手持たせ装束巻上げ駈来り。ヤア、それををる櫻丸。おのれ最前齋世の宮を奉幣も濟まぬうち連退いたとの風聞。何處へ供したサア吐かせと。せちがひかゝれば存せぬ〜。下として上の事。其方をとつく〜。お尋ねと言はせも立てサヤア吐かすまい。猶豫て汝が取持にて物くさい事聞いて居る。取分け今日は御惱平癒の神いさめ。其場所へ来て不淨があると。親王でも東宮でも急度捕へて罪に行ふ。有様にぬかさずば引捕へて拷問するそれ。右様にかけよと下知の下おつ取巻くを身稱し。知らぬというたら金輪際。奈落の底から天まで知らぬ。聊爾召さると片つばし。下手のお鞠の蹴て〜蹴踏む。足の鹽梅見せうかどぐつと踏出す兩足は、顔に似合はぬ古木なり。シヤ下郎めが味をやる。最前から見の所が車の内に人こ

そあれ。御籠引断り檢めよといふに随ひ立寄るところを。首筋掴んで投退け投退け。詞車は舍人が預り物命があらば寄つて見よと。かゝるを蹴飛ばし跳飛ばし十手掬取り片つばし、フシ薙立て〜追うて行く。其間に宮と姫君は人に見られて叶はじと。車の内より飛び下り〜さすが若氣の一筋に。遁れて旅のかり衣フシ何國ともなく落ち給ふ。隙間を見て行が取つて返して車の内。引明け見れば内は空葺。詞南無三寶見違へた。舍人めが戻つたら大抵ではあるまいと。下道さして逃ぐる跡。間もなく駈来る櫻丸。御二方の見えぬに悔り。車を見れば宮の書置。詞何々。見付けられて辱を受けうより立退くとある文章に。地ハツト驚き胸は板イデ。追付いて御供と駈行く向うへ女房八重。詞サアこれお手洗汲んで来たと。見せるを撥退けナニ手洗どこ

ろか。圓清めが車の内詮議せんと来りし故。見付けられじと二方は何國ともなう落ちなされた。ヤア地そりやマア眞かと女房はびつくりぐわつたり水桶落し。

詞シテまあ此方はこりやどこへ。ヤア何處どころか元姫君は菅家の御養子。實母は河内土師の里。菅丞相の御伯母君。先づ此方へ志し跡を慕ひ奉る。汝はあの御車を宮の御所へ引いて行け。捨て置いては後日の咎め。成程さうぢやこな様の。姿に扮して引いて行こ。ドレ白張と受取つて。詞跡案じずとも行かしやんせ。ヲヲ合點と白砂蹴立て。フシ飛ぶが如くに駈り行く。地八重は頓て夫の妾白張肩につかけて。車の牛を引直し。させいほうせい精一はい。引けども遅き牛の足。エどんくさいと後から。押せば車もくるくると。調廻る月日は不成就日か。お二人様の凶會日か夫の爲には十方暮。

車を押しかけて。天赦天一天上のお首尾もよかれ神よしと。祈る心は八專の。黒口に間日の斑牛。追立ててこそ三興立歸る。上根とハケシ糞古と好と三つの中。好きこそ物の上手とは。藝能修行教への金言。公務の暇明暮に好ませ給へる道眞公。堂上堂下はいふに及ばず。武家町人に至る迄。風儀を慕ふ御門人。フシ數も限りもなき中に。地左中辨平の希世手習稽古ふる兄弟子。今度筆法御傳授は指詰我等に極りしと。勝手覚えし御殿の眞中。朝の夜から机を直し。フシ烟草よ茶よと呼立つる。地聲も届かぬ奥勤め女中頭が聞咎め。詞コレお次に誰も居やらぬか。希世様の御用があると。地呼次ぐ。局に不足顔。コレ詞手の皮がひりつく程叩いてもしゅらしん。ムウ合點。顔出しせぬは毎日来るを面倒がり。言合せて鼻あかすのか。今日で七日此手習。おれが爲ばかり

ぢやない。御子息の菅秀才は年弱七つ。傳授所へ行かぬによつて。此希世が傳授して。菅秀才の成人以後。身共から又傳授さすれば主の奉公も同じ事。ハツボといて廻る筈。總じてこなたが生温こい。コレ勝野よう心得や。そなた衆の不調法。こける所は局が迷惑。何おつしやろとあい／＼とナ。申し希世様。成程さうぢやよい了簡。毎日々々氣を詰めるも菅原の家の爲。地今日も亦此清書。フシお目にかけてと差出す。詞イヤ今日は御赦され。赦せとはなぜ／＼。ハアテ幾度お目にかかれましたも。丞相様の氣に入らぬは。お手の業ではござるまい。取次の仕様の悪さ手はりに今日は勝野。イヤこれさうはならぬ。筆法傳授も神道の秘密事。學問所の注連が目に見えぬか。油こい女子はやらぬ。昨日迄は氣に入らずと。此清書は格別筆先に肉を持たせ。天晴

骨髄を書き得たれば。傳授はするべく伸切つて往てたもれと。フシ頼むに是非なく立つて行く。詞コレ勝野。局のいはれたあい／＼を合點か。地アイ心得てをります。詞エ、忝い幸ひ遂に人もなし福徳の三年め。地屏風の陰でついちよこ／＼と。取る手を振切りエ、いやらしい。無體な事なさるゝと聲立てるが合點か。詞ヲ、合點ぢや。聲立てるが怖いとて。しかけた戀人叶ひをれと。地ほうど抱へて連れて行く。アレ／＼申し。詞申しとは誰に申し。ア、御臺様や若君様申し／＼といふ聲の。フシ洩れ聞えてや。菅丞相の御臺所。若君の御手を引立て出で給へば。希世は仰天は／＼、悪い所へよう御出と手持不沙汰も減らず口。詞勝野に癩の療治を頼まれ。取りにかゝつて斯くの仕合。御臺にも御存じの如く萬能に達せし某。世に希な器用者として。希世と付け

たは親共が自慢の名。其例は此若君年よりは御發明。菅秀才と呼び給ふも。秀はひいづる。才は才智の才を取つて。菅家の公達菅秀才。地あら／＼謂フシかくの如し。地我等はあんまり器用過ぎ。取損うた按摩のしだら。御臺所の思召が。詞アその言譯に及びませぬ。日頃の行儀知つて居る。地そんな疑ひ何のいなと。フシ物に障らぬ御挨拶。詞ア、それ聞いて落付いた。今のしだらの序ながらお尋ね申す事がある。御息女の刈屋姫。齋世の君とにやぼやした世間の取沙汰。今日で七日相詰める。御所には何の沙汰もない虚説かと存すれば。刈屋姫の御殿は明家。御詮議もなされぬは親御達も合點の上。駈落でがなござるかと。地問はるハ辛さは御臺所エエ暫し。返事もなかりしが。地隠しても隠されぬさがなき人の口の端に。かゝるも是非なき刈屋姫。齋世

の君はなほ以て大切なお身の上。互に忍ぶ戀路の車廻り逢瀬もそこ／＼に。事顯はれしを恥かしく思召され。御所へお歸りなされぬものとあつて常の御方ならねば。宮様附々の人々がそれなりけりにして置くまい。又此方の娘の事は希世様も知つての通り。ほんの母様は河内國。土師村の覺壽様とて。連合の爲には伯母御様。菅秀才を設けぬさき乞請けて養子娘。此御所へ戻られず伯母様方へと心づき。自ら内證で尋ねに人を遣はした。此一落は今日が日迄わざと父御へ。フシ知らしませぬ。地それも何故勸諭にて筆法傳授七日のうち。参内やめて取籠り世の取沙汰は何にも知らず。傳授も過ぎて聞き給はば嗚やびつくりし給はんと。彼方此方を思ひやる心を推量してたべと。フシ案じ給ふぞ理なる。地内玄關の寮者番一間此方に畏り。詞先年お館に相勤めし武部



源藏定胤。尋ね参れとの仰せにより。此間所々方々吟味致して。漸う只今夫婦一所に参りたり。是へ通し申さんやと、堀伺へば御臺所。詞ヲ、待兼ねし源藏夫婦。早々此處へ参れといへ。コレ菅秀才。源藏に逢ふ間爰にゐては氣が蕪けう。勝野を奥へ連れて往て機嫌よう遊ばしやれ。希世様にも暫しが間。ヲ、此處にゐて邪魔にならば。堀所禁任らんとオクリ續いて。奥にぞ入りにける。堀人知れずと、ハルシ思ひ初めしが主親の。不興を請ける種となり。夫婦が二世の契より三世の御恩辨へぬ。不義より御所を追出されさむい暮しを素浪人。尾羽打枯れし武部夫婦。今日のお召は心の優曇華開く襖の内外まで。勝手は今に忘れねど身の誤りに氣おくれし。ホラシ膝もわななく窺ひ足。御臺の御座を見るよりも。ハツト畏れて飛びしさりフシ踏りたるばかりなり。堀ヤア珍らし

や源藏夫婦。詞連合の氣に背き。此御所を出やつたを數へればもう四年。日頃人を捨て給はず。慈悲深い程きつさもきつい。思ひ切つてはいかな事見返らぬ夫のお心。叶はぬ事と思ひの外。源藏に参れとある御用の様子。何かは知らぬか氣遣な事ではあるまい定めて吉左右。ヤア自らがいふ事ばかり。さぞ待兼ねでござるである。源藏夫婦が参りしと誰を奥へお知らせ申しや。サア二人共に顔も上げ近う寄りや。ハアテ遠慮に及ばぬ近うく。年月の浪人住居。渡世が苦になつたか昔の面影どこへやら。源藏が着てるやるは荒々しき下々の着物。戸浪はそれに引きかへて。小袖縫箔さすがに女子の嗜か。二人の中に子も出来たかと問はれて戸浪は。フシ有がた涙。詞冥加至極もないお詞。主人のお目をくらませし罰が當つて苦勞の世渡。堀夫婦が着替も一

つ賣り二つも三つも朝夕の。煙の代に成果てし。やうく殘せし此小袖は。御臺様の下されし御恩を忘れぬ賣殘。堀裳の飾りの鼈甲もいつかは杵の引櫛と變りはてたる共稼。詞連合は布子の上。糊立たぬ麻上下もけふ一日の損料借。ア、おはもじ。お上に御存じない事まで。身の耻顯はす錆刀。今日まで人手に渡さぬ武士の冥加。アイ。女房が申上げます通り。この態になりさがれば。堀一入昔の不義放埒。思ひ廻せば主人の罰悔むに詮方なき仕合と。夫婦諸共おろく涙。堀折から局は奥より立出で。詞お學問所へ召しま

たる障子明け渡せば。恭しく注連引きはへ。常に變りし白木の机。欣然として坐し給ふ。凡人ならざる御有様畏れ敬ふ源藏が。五體の汗は布子を通し、フッ肩衣絞るばかりなり。地やゝあつて仰せには。詞さりがたき仔細あつて汝が行方を尋ねしに。住所さだかならず。やう／＼昨日在所を求め。今の對面満足せり。その方儀は幼少より我が膝元に奉公し。地天性好いたる筆の道。詞好くに上り習ふに覚え。古き弟子ども追抜き。あつばれ手書になるべしと。思ひの外に主従の縁まで切つてその風體。筆取る事も忘れつらんと。地仰せに猶も恐れ入り。詞御返答申すは憚りながら。前斐立の時分よりお傍近う召使はれ。手を書くことは藝の司。書けよ習へと御意なされ。御奉公の間々書き覺えたと申すも慮外。蚯蚓のたかつたやうに書く手でも藝は身を助ける

とやら。浪人の生業鳴瀧村で子供を集め。手習指南仕り今日まで。夫婦が命毛筆先に助けられ。清書の直し字毎日書けども上らぬ手跡。御尋ねに預かる程身の不器用と御勘當。悔むに詮方なき仕合せと。地敷くをつら／＼聞き召し。詞子供に指南致すとは。賤しからざる世の營み。筆の冥加藝の徳。申すところに偽なくば。手跡もかはらじ改むるに及ばねども。爰にて書かせ道真が所存は後にて言ひ聞かさん。認め置いたる眞字と假名。詩歌を手本に寫し見よと。地白木の机御手づから差寄せ給へばハアはつと先へはフッ出です。跡すさり。地志根懸の左中辨物陰よりすつと出で。詞コリヤ源藏様子残らずあれから立聞く。師匠の指圖は兎も角も。辭退申し出づる筈が。兩手をついて目をましくし藝の所作がらするは。書いても見ようと思ふ氣かそれはの太い

叶はぬ事。ハアお馴染とあつて忝い。希世様のお詞に一つも違はぬ役に立たず。併し身の分際を頼みぬ。源藏めでもござりませぬ。只今これにて書けとあるお手本。書いて可いやら悪いやら。跡先の様子も存ぜず。四年以來在所住居。くさ塵に三文筆。書出しや反古の裏に書けならば場打もせまい。其結構な机に墨筆。大高檀紙の位に負け。一字一點いかな。ホ、好いたる簡。いかぬと知つて何故立たぬ。サアそこでござります。御勘當の私。御意にあまえた身の願ひ。お執成頼み上げます。ムウそれで聞えた。説言はしてやろが今はならぬ。といふ其仔細ひつ揃んで咄して聞けう。此度帝の仰せには。存命不定の世の中。生死の道には、老若差別はなけれども。マア年寄から死ぬるが順道。青丞相は當年五十二。天命を知るといふ。齡も過ぎ寄る年を惜ませ給ひ。

て唐まで響むる菅原の一流。これまで傳授の弟子もなし。二代限で絶やすは残念。手を選んで傳授せいと。勅説で七日の齋戒殊の外お取込み事済んでから願うてやる。ハア様子段々承れば御大慶な勅説。

サア其勅説も大慶も知れた事はすとも。早々歸れとせり立つる。イヤ立つな源藏。いひつけた手本只今書けと。地仰せは武部が身の大慶。希世は偏執へんしやくむしやくしや腹。立寄る源藏睨み付け。調わりや兄弟子に遠慮もせず。書かうと思つて出しやばるか。ホ、お笑ひあつても恥しからず。御免なれと机にかゝり。手本を取つて押戴き。ハルン心慮せず摺る墨の色も匂も聲しき。フシ筆の冥加ぞ有難き。地希世傍へすり寄つて。調わが様な横着者は手本の上を透すつ寫し。その手目は身がさせぬ。恥と頭はかき次第。身のさまの恥煩わりや何とも思はぬか。温袍ぬるたうの上に

汚れ榜。机に直つて居るさまは。貧乏寺の講中奉加場の帳付に其儘。無縁法界を書くなよと。地悪口たらしく言ひちらし。怪我のふりにて机を動かし。肘に觸つて邪魔するも構はず咎めず手本の詩歌。心よく書き終せ机も共に御前に直しフシ退つて。頭を下げゐたる。地丞相清書を取上げ給ひ。調鑽沙草せんさそう只三分計。跨樹霞かまじり餘。是は我が作れる詩。昨日こそ。年は暮れしか春霞。春日の山に早や立ちにけり。是は又人丸の詠歌。何れも早

脊の心を詠みかなへり。假名といひ。眞字といひ是に勝れし筆やあらん。地出来したりく。調惣じて筆の傳授といつば。永字の八法筆格の十六點。名をそれいふに及ばず人々の知る所。菅原の一流は心を傳ふる神道口傳。七日も満つる今日只今。地神慮にも叶ひし源藏とフシ御悦びは限りなし。調ハア有難や忝い。

筆法御傳授あるからは。御勘當も赦され前にかはらぬ御主人様。ヤア主人とは誰を主人。傳授は傳授勘當は勘當。格別の沙汰なれば。不届なる汝なれども。能書なれば捨置かれず。私の意趣は意趣。筆は筆の道を立つる。道眞が心の潔白寂閑に達しても。地依估とは思召されまい。

調希世にも疑はれな。勘當は前の如く主でなし家來でなし。この以後對面かなはじと。地鋭き御聲源藏が肝に燒鐵刺さるる心地。道理を分けての御意なれども傳授は外へ遊ばされ勘當。スエテ御免と泣き説ぶる。調コリヤ源藏が歎くが道理勘當を赦されねば。傳授しても規模がない。彼が願ひも希世が望みも立つやうの了簡は。傳授と勘當かへくにして遣はされたら。よささうなものやうに地存じますると。フシいふ折から。地當番の諸大夫罷出で。調俄の御用これある間只今參内

遊ばされよと。瀧口の官人參られしと。申上ぐれば御不審顔。○七日の齋戒過ぎざるうち。御用とは何事。隨身仕丁の用意せよと。フシ裝束の。間に入り給ふ。參内と聞召し立出で給ふ御臺所。襦の下に戸浪を押隠し入目つゝみも餘所ながら。お顔をせめて拜ませんと心づかひは希世が手前。○傳授の様子承れば。お前には残り多からう。仕合は源藏さりながら。御勘當は藏りぬげな。○館の出入も今日限りかなたこなたを思ひやり。御參内を見送りがてら。それで／＼と襦の下をしらす御目遣ひ。夫婦は重々お情の身にしみ渡る。○東帯氣高き管承相。一間の内より立出で給ひ。○神道秘文の傳授の一卷源藏に賜はりける。當座の面目御流義末世に傳へる寺小屋の敬ひ申し奉る。○因縁かくとぞ知られける。○ア傳授済むからは對面これまで。罷り歸

れ立てよ／＼と頻の御説。コリヤ源藏。吠頬かいてももう叶はぬ。腰が抜けて得立たずば。○引摺り出さんと立寄る希世。なう荒氣なくし給ふな。○三世の縁の切目ぢやもの。○立てぬも。○理歎くも道理涙とめて御暇乞。見奉れと襦の棲より覗かす戸浪が顔。それぞと推し給へども知らず顔にて立出で給ふ。何としてかは召されたる御冠のおのづから。落つるを御手に受留め給ひ。○物にも觸らず脱げたるは。ハアはつとばかりに御氣がかり。イヤそれは源藏が顔ひ叶はず落深いたす。落は落つると訓むなれば。其験でがなイヤ／＼左にてはよもあらじ。參内の後知れる事。源藏早く歸されよ。冠正して。參内ある。○希世はこは／＼御見送り。御勘當の身の悲しさは。行くに行かれず伸上り。見やり見送る御後影。御簾に障へられ御立の邪魔になるのも天罰と。

五體を投伏し男泣き。戸浪が悔みは夫の百倍。こなたは御前のお詞かゝり。直にお顔を見さしやつた。私はやう／＼御臺様の後に隠れてあんじりと。お顔も拜まぬ女房の心。思ひやつても下されぬまがちな一人泣。同じ科でもこなたは仕合。女子は罪が深いといふどうした謂でなせ深い。鈍な女子に生れしと。御臺のお傍も憚りなくフシ果し。涙ぞいちらし。○希世のさ／＼立戻り。○ヤア源藏を歸されぬは。御臺様御油斷／＼。一刻も早くばいまくれと。重ねて仰付けられたことを少し身が了簡。そのかはりには傳授の巻物。讀んで見る望みはない筆の冥加にあやかる爲。ちよと戴かしてくれんかと。○望むには是非なく懐より。取出すを引手繰り逸足出して逃行くを。どつこいやらぬと源藏がほつかけばつ詰め襟がみ掴み。引摺り戻して擔き投げ。大の男

に一泡吹かせ。傳授の一巻取返し。詞  
れをおのれが引掛けうで直垂の羽織ひ。  
靈薦の背張め。びくともせば打殺すと。

地刀四五寸抜きかくる。詞コリヤ源藏聊  
爾すな。地戸浪過さすなどお詞かゝれ

ば。詞エ、エ、おのれエ、エ、おのれ  
をな。只助けるも残念な。地寺子屋の折

檻の机はこいつが貴道具。女房此處へと  
取るより早く背中に机おほげなし。兩手

を引張る机の脚。裝束の紐引き雁字搦  
に括りつけ。蓋ひろいだ師匠の篋。竹篋の

代り扇の親骨。頬に見せしめひりつかせ  
んと打立てく突飛ばせば。痛さも無念

も命の代りフシ恥を背負うて歸りける。  
源藏夫婦手をつかへ。詞禁裏の様子承り

歸りたく存すれども長居は恐れ。御臺様  
此上ながら夫婦が事。お捨てなされて下

さりますな。ヲ、それは心得たが。今行  
くといふを聞捨に。せめて一夜といはれ

もせぬ命が物種。縁も盡きずば又逢はう  
もう行きやるか。アイ。アイ。地参りませ

ねばなりませんでござりますと戸浪が涙  
フシ長沙に乾く。間もなき袖の海。見る目

いちらし夫婦が姿泣く。御門を三重  
へ出でて行く。地源藏と引遠へ歸る梅王あ

を息吐息。門の臺木に足躓きかつばと轉  
けて起きる間も待たれぬ。侍衆。詞御

大事が發つて来た。科の様子は何かは知  
らず使の廳の官人共。丞相様を取廻し。鐵

棒破竹アレ。爰へ。地御臺様へ此様子  
をと館の騒動門外には。鐵棒打振り聲固

の役人。輿にも召させ奉らず。菅丞相の前  
後を圍み。先に進むは時平が方人三善の

清行。門外に立ちはだかり。詞齊世親  
王刈屋姫。加茂堤より行方知れず。仔細

御詮議なされし所。親王を位に即け娘を  
后に立てんとする。菅丞相が豫ての工。  
其罪遠島に相極り。流罪の場所は追つて

の沙汰。それまでは押込め置き出口々々  
に大貫鏝。門の聲固は身が家來。荒島主

税を付置くと。地呼ばはる聲を聞くつら  
さ。御臺は聲固の人も恥ぢず走り寄つ

て道眞公。コハそもいかなる御事ぞや。  
齋戒の間の事姫が身の上御存じない言譯

は何故なされぬ。科もない身を左遷との  
仰せは聞えぬギンシ恨めしやと歎き。給

へばハア。愚か。道眞虚命業れども。君  
を恨み奉らず。漸く齡傾きし臣が拙き筆

跡迄。惜ませ給ふ傳授の勅詔。地昨日迄は  
寂應に叶ひ。詞今日は逆鱗蒙るとも。地皆

天命の爲す所。詞先程冠の落ちたるは殿  
上の箆を削られ。無位無官の身となる知

らせ。今さら悔むは愚か。地これよ  
り配所へ行くにもあらず。見苦しく。歎

かれなとフシ御臺を。遠ざけ給ひける。  
地希世は道より取つて返し。詞清行殿御  
苦勞千萬。此和郎の様子承はり。弟子の

方から師匠をあげ向後頼むは時平公。菅丞相と一つでない執成宜しく頼み入る。

氣遣ひあらね呑込んだ。作法の通り菅丞相。内へ追込み門を打て。地長つたと荒島主税判竹振上げ立ちかゝる。コレ待つ

た其役目希世が代つて仕ると。割竹受取りコレ謀叛人殿。詞今迄とは當が迷ふ。時

平公へ宗旨をかへた手見せの働き。割竹一つと振上ぐれば血氣の梅王すつと寄り。希世を四五間突飛ばす。詞ヤア下司の

慮外者自滅したうて出しやばつたな。ハレヤレ知れてある下司呼ばはり。こなた

の口から慮外とは、ハ、ハ、ハ、腸がよれ返る。其割竹振上げて誰を〜ヲ、サ謀叛

人の此わちよを。ヤア謀叛とは誰を謀叛。御恩を忘れし人非人。菅丞相にはお構ひ

なくとおのれに罰は身が當てると。飛掛る梅王丸御手を指延べ引寄せ給ひ。

詞ヤア賢しい汝が振舞。勅詔に依つて

かくなる道眞。希世はさておき。其外へも手向ひするは上への恐れ。汝は勿論館

の者共我が詞を用ひすば。七生迄の勘當ぞと。地聞いて希世がこはげも抜け。詞コ

リヤ梅王。して見ぬかい。頼術ばかりの腕なしめと。地のさばる無念怏へる梅王。

是非も情も荒島主税。官人ばらに追立てられ。すご〜館に入り給ふオクリ御有

フス様こそ痛はしき。地サア〜用意の大貫鏝。表と裏へ手分の人數築地の穴門

樋の口まで。暫時の間に打付けしハッ物忌はしく見えにけり。清行見廻しハ

レよい氣味。詞出口々々の締りもよいが。築地の屋根も越さうも知れぬ。主税万端

油断すな。暮に及べば希世殿。地いざ歸らんと打連れて六七間も打過ぐる。築地

の陰に待居たる武部源藏ぬつと出で。希世を一當閔絶させあわてる清行相伴投。

スハ狼藉者打ちのめせ殺せ縛れとひしめ

いたり。武部は戸浪に指添渡しヲシ寄らば切らんす勢ひなり。地希世は漸う人心

地。立上つてヤアラぬは源藏め。詞一度ならず二度ならずひどいめに合したな。

うぬがする狼藉菅相丞がさしたになつて。流罪の仕置が死罪になると。云はせも

果てす高笑ひ女房アレ聞け。物覚えのない抜作殿。傳授は受けても勘當ゆりぬ。

この源藏には主人がない。梅王は主持でおのれめを責ます。怏へてゐるかはいさに名代に投げてこました。名代次手に皆

撫切と。女房諸共抜放しめつたなぐりの太刀風に。小臈侍鋸屑公家。フシ吹立てら

れて散り失せけり。地敵なければ立歸る時節も幸ひ黄昏時。門の扉をとん〜と

ん扣けば内より咎むる聲。詞聞き覺えた梅王か。さいふは武部源藏殿か。殿どこ

ろかい若い者油断してゐる所でない。扉の釘付踏破り。御主人達の御供し此場を

退くは易けれど。おこことが今も聞く通り仁義を守る道真公。とあつて識者が計ひにて。お家の断絶覺束なし。御幼少の御若君夫婦が預り奉らん。所存を立つるはコレ梅王。若君をこつそりと。築地の上からできた源藏殿。お上へいうては得心あるまい盗み出すがお家の爲。さうぢやく能い了簡。一刻一步も早や退きたし。頼むといふ間もなく築地のオクリ上からハルシ梅王が心の早咲き勝色見せたる花の顔ばせ。大事の若君怪我さしますまい。心得高き築地の屋根。仲上つても届かぬ背丈。とやせん戸浪を抱上ぐれば。軒に手届く心もとく若君請取り抱下し。外と内とに忠臣二人胸は開けどフシひらかぬ御門。荒島主税日早く見つけ。ヤア盗人の隙はあれど守人の隙がない。宵唄めを手引する内と外との相盗めら。菅秀才を盗んだ此旨。注

進せんとけ出す先に源藏が。立塞つてどこへ。おのれを遣つてよいものと。討つて掛れば抜合せ切結び切解き。追つつ返し二人が勝負。屋根の上から見てゐる梅王。棧敷正面真向二つ。破れて命は荒島主税。とどめに及ばぬ切捨て。危い場所を盗人夫婦。行末榮ゆる菅秀才。若君頼む夫婦の衆。館の父君母君を頼むぞ梅王心得たと。互に頼み頼まる。忠義々々を書き傳ゆる筆の傳授は寺子屋が一藝。一能名も高き人の。手本となりけり

## 第二 道行詞の甘替

弘める。櫻飴を買はつしやい櫻飴々々。ハルシ櫻々と。おのが名を。いへども包む頬かぶり。木綿頭巾に袖なしの。羽織は軽きフシ身なれども。忠義は重き牛飼の櫻丸はいつぞやより。賀茂の川浪立出でし。齋世の宮と姫君に。漸うと廻り逢ひ。一日二日は我が家にも。忍ぶに何と菅原の。伯母君頼み参らせんと。行くは車の供ならで小オクリ跡と。先とに打荷ふ館の荷箱のかたへ。御二方を入れ参らせ浮世を士師の里へとて。館のとりに賣りて行く。フシころオクへづかひぞ。せつなけれ。フシ都をば夜を深。草に。出でても道はあやなくて。ヌエテ御香の宮に明け渡る。道を芥川淀も越え。町を過ぐれば爰ぞよし。誰かは何と石フシ清水。サア。お出でと荷をおろし。箱を開けば堆高き姿あらはに刈屋姫。暫く拜む日の影に。目なれぬ山や知らぬ里。

思ひなくてぞ見まほし。なう宮様とありければ。増さればとよ。そなたの父背相いかなる事の誤りにや。押籠の身となりけるも我々出でし跡なる故。正しくは知らねども。やがて赦されしありぬべし。兎にも角にも我が身は今賣る館の如くにて。詞傘に覆へる日かけの身。つかとけなん心ぞと。御仰せに櫻丸。詞左様にては候はず御忍びましますも。飴をば上に君を下。取りも直さずあめが下しろしめす瑞相にて候ふと。増申上ぐるに宮は猶勿體なしと身をすべる野路の。咄追。しそろく。炭が裾に手を入れてフシハル袂ひるがへす。裏模様とめ木に草も芳しき。春の野面に群れる蝶。ハズミ袖にとまらば。羽摺りて鏡絶やせし。フシ化粧せん。爰に我が名をかりやの里。今苗代の時を得て。民の手業も遠目には。いと珍らかに。引鶴の聲に千歳も變らじ

と。増契りし今の闇の内背よりしめて寝る夜さは。月は出るやら曇るやら。三下り唄枕とる手に。寝て解く帯の。いかいお世話。枕とる手に。寝てとく帯の。いかいお世話。結ばぬ夢を覺せとや。いお世話。結ばぬ夢を覺せとや。フシ春の風。ぬるみし空の快く。行手の森の人音に。見付けられじと手ばしかく。又忍ばする飴賣が。片手に太鼓片手に撥。聲をかしくも拍子とり。三下り拍子こんりや。是が天子の始めなされた神武飴とて。合神武天皇は飴がお好きで練らしやりましたる名物飴をば。こちらも仕習て鳴等や嫁等が。紅絹の袴をしんどろもんどろかけて。合しんとろり。合もんとろりと練りやりましたを買ほなら今ぢや。アソビナホス賣る聲の。フシハル子供あつめに子の親が。袖の土産を買ひに来て認める間の取沙汰に。惜しや都の菅丞相筑紫へ流され給ふ故。津の國安井に風

待しておはしまするはいたはしと。フシ所縁と知らず告げて行く。ヘルフ跡の驚き。悲しきは箱を細目に顔ばかり。なに道眞は左遷とや。父上安井にましますとや。せめてお顔が拜みたい。何卒お船の出ぬ先に。逢はせてたも櫻丸頼むくもしどろにて。フシわつとばかりに泣き給ふ。ヘルフ聲をも人に知らせじと喇叭の笛に紛らして。それより道を横切れに。一荷の涙擔ひ行く。先は何處ぞ津の國の安井の岸の安からぬ思ひ重ねぬ。三重へ哀れさよ。増世につれて海の面も風さわぐ。湊に御船とどめしは菅原の道眞公。終には議者の舌強く覺えなき身に。罪極まり。筑紫の宰府へ流罪の籠船津の國安井に着きしかば。誓固の武士は法皇の舊臣院の應判官代輝國。逢坂増井に陣幕打たせ見るめ殿しき鐘長刀。數多の官人四方を圍ひ出船を松の下かけに。フシ日和。見合せむたり



ける。地判官代輝國海の面を見渡し。幕  
絞らせて丞相のおはします。籠輿ろうごの下に  
手をつかへ。詞沖の様子を窺ふ所に。五  
三日も御出船の日和とも相見え申さず。  
この所に御逗留あらうより。河内の國土  
師しの里へお越しあつて。伯母君覺壽公と  
も御暇乞ひ候へかしと。地申上ぐれば菅  
丞相かんやつれたる御顔ばせ。物見より現  
はし給ひ。詞院の御所に使はるれば。上  
を學ぶ下々まで情ある武士よ。地かく囚  
人となりし身を。赦し送らば我よりも。  
おことが罪はいかにせん。フシ思ひ寄ら  
ずと宣へば。詞こは有難き御仁心。左程  
奪き御方の。お爲になつて咎めにあはは  
死後の面目子孫しよんの繫つな。殊に私わざならず  
法皇豫ての仰せには。土師の里に伯母あ  
りと聞き及ぶ。もし津の國にて沙待さまたの隙  
あらば。暇乞ひまぎさせよと密々の御仰せ。何  
憚はげる事こともなし御心置きなく土師の里へ御

出と。地勤め申せば菅丞相。都の方をう  
ち詠めさせ給ひ。詞世に有難き法皇の御  
心や。天子に父母なしと雖も現在の御父  
君。其御力に及ばずして斯く凶人となる  
事は。地如何なる罪の報ぞや。はかなの  
浮世や淺まししの身の果やと。三世を悟る  
御身にも。世をつらしとの御述懐。フシ  
哀れにも又いたはし。地日和見の船頭  
罷出で。詞今朝の天氣相まだ二三日も御  
逗留と存ぜしに。思ひの外立直り風治ま  
り候へば。地御出船の御用意といふより  
輝國ヤア黙りをろ。詞立直るまじき日和  
立直つたと吐かずからは。よき日和の悪  
しくなるもおのれが眼にかゝるまい。イ  
エ／＼左様ちや御座りませぬ。二八月は  
船頭ふねがしらのあくみ時。得ては手の裏返します。  
ソレまだ吐かず。左様な手の裏返す日和  
に。大切たいせつな流人の船出さるゝものか。イ  
エサこれは儘ままに。ヤア狼狽ろうたい者。向う山に

雲がかゝつてまだ四五日も御出船の日和  
はない。いらざるおのれが奉公ぶりと。  
地呵りつくれば悔りし。いかな巧者うまいものな  
船頭ふねがしらでも。この暴風には仕様がなないと  
ハズミフシ眩くらき／＼入りいにける。菅丞相は輝  
國が志法皇の。御心の有難さに。河内の  
國へ赴かんと。仰せゆたかに安々と御輿  
とどまる所とて。井の字を居ると書きか  
へて。安居の宮と末の世に仰ぐも神の威  
徳かや。かゝる折から櫻丸宮姫君を御供  
申し。さきに進んで馳來り。詞菅丞相御  
流罪と承はり。縁類の者暇乞の願ひ。ま  
た一つには科の様子も承はりたし。地御  
役人へ直説と立寄るを數多の官人。ヤア  
直説ちせつとは慮外者暇乞とは無法者。油斷  
ならずと取巻とらまを。それと悟りて輝國。  
ヤレ聊爾ちやうにすなと押鎮め。詞科の様子聞き  
たくば云うて聞かさう。上より咎めの條  
條具じょうぐにいひ聞き給へども。齋世の宮と刈

屋姫密通の言譚。御存じなきとて詮立たず是非なく科に落ち給ふと。堀聞いて悲しく刈屋姫宮誹共に駈出で給ひ。なに我れ故因れとや。情なや浅ましや不義は二人が誤りぞ。流しなりとも切るなりとも罪に行ひ丞相を助け得させよ父上に逢はせてたべ助けてたべ。對面させよと二方は泣き叫びヌエテ給ふにぞ。堀輝國遙に頭を下げ。詞恐れながら御對面あつては。彌々丞相の罪重くなる道理。元此おこりは去る頃。君天子に成り代り御姿を唐僧に寫させしは菅丞相の計ひ。唐土まで天子と思はせ我が娘を後に立て外戚とならん下工と。讒者の舌にかゝるうち宮姫を連れ御出奔。いよくそれと叡間に達し罪なくして罪に沈む。殊に姫君とは親子の中。これ天子への畏れあればよもや對面候ふまじ。堀とかく此上菅丞相の爲を思召さば。これより刈屋姫と御縁を切ら

れ。再び禁廷へお歸りあつて。詞謀叛なき趣を仰せ分けられ。丞相歸洛を御願ひ候へかしと。堀申上ぐれば齋世の宮。我れゆゑ罪に沈むも悲し。又我をのみ戀慕ひ付添ひ來る契りをば。見捨てて何と去なれうぞと仰せ給へば姫は猶更。父の爲には怨敵我を罪して御流罪を。赦してたべ人々と伏沈みく。消え入るばかりに泣き給へば。媒したる身に取つて。辛さ苦しき櫻丸。骨にも身にもしみ渡り。思へばく我なくば此戀誰か取持たん。科人は外ならずと悔めど今更詮方も。涙先立つ計りにてとかう。フシ詞もなかりしが。堀立直つて宮のお傍に恐れ入り。詞私もとは土百姓の悴。御扶持を下され君の舍人を勤めるも皆菅丞相様のお蔭。其恩ある方を流罪させのめく見てはゐられず。と申してから我々風情の及ばぬ所。輝國殿の仰せの如く。これより姫君と御縁を

お切りなされ。他人となつてお願ひあらばよもや叶はぬ事もござりますまい。再び丞相様御歸洛あつて後。表向の御縁結び。堀暫しの間のお別れお聞入れ下されよ。と身にかゝつたるせつなさに。ヌエテ士に平伏し願ふにぞ。齋世の宮は猶涙。一旦館を出でし身の面恥かし二度の恥と。仰せに輝國詞を返し。詞御館へこそお歸りなくとも。法皇の御所へお越しあらば猶以て御願ひのよき便り。堀ひらには非にと勸むるにぞ。とかく涙にくれながら姫君に差向ひ。我が戀草の思ひに迷ひ。丞相の歸洛を願はずば天道怒り給ふべし。契りは盡きず變らねども親の爲と諦めて。別れてたも刈屋姫と涙と共に宣へば。詞は勿體ない。お歎きをかけるも元は自ら故いつを焦れて死んだらば今の思ひはあるまいに。堀お名殘惜しやと御顔。見るも涙見らるゝも。ハルフシ

涙。片手に。詞又逢ふまでは随分まめで。  
おまへ様にも御機嫌でと。地跡は涙のす  
がり泣きわつとッ絶え入り給ひける。  
へッシかゝる折節。何れとも知らぬ女中  
の乗物つらせ。怖めず臆せず判官代に差  
向ひ。詞私事は土師の里立田と申して。菅  
丞相の伯母の娘と。地聞くに嬉しき刈屋  
姫。コレ姉様ナウ立田様かいのと。取付  
き給ふを突き退け刃ね退け。詞母の覺壽  
左遷の様子を聞き及び。年寄つての悲し  
み御推量下さりませと。地いふうちに又  
姫は取付き。そのお歎きが身に取つて猶  
悲しいと。歎くを振切り。詞何卒此所の  
汐待を土師の里にて御一宿あらば。心よ  
く暇乞も致し度き願ひ。明日をも知らぬ  
老の身の。少しは歎きも留めたく無體の  
御訴訟。夫宿彌太郎が参る苦なれども。  
那役も勤める身で身勝手な事申すも如  
何。女の慮外は常の事と。不調法も願ひ

すお願ひに参りし。地お役人の御了簡。偏  
に頼み上げますと。願へば輝國。詞イヤ  
一家の願ひ叶はぬこと。大切な凶人浪打  
際の一宿心許なく。只今用心のため土師  
の里へ立越える。一宿は覺壽の許と。地  
聞いて嬉しく。詞エ、それはマア結構な  
御用心と。地悦び勇む立田が袖。姫は控  
へてコレ申し。とてもの事に父上にお目  
にかゝるお願ひと。頼む袂を振放し。詞  
恐れ多い。丞相様へどの顔さげて逢はう  
と思召すぞ。もあなたに菅秀才といふ  
お子のない先。母様がお前をば護の上よ  
り遣はされ。私が爲に妹でも今は菅原の  
姫君様。勿體ない宮様へ戀仕かけて今こ  
の大事になつたでないか。戀は心のほか  
でもな。これはあんまり外過ぎて姉のわ  
しまで人々へ顔が出されぬ。地恥かしと  
呵る心も姉妹の。ッさすが證と知られ  
ける。地興の内には菅丞相わざと詞をか  
け給はず。事を計るは判官代。ヤア詞立  
田殿今さら御意見なき事。コリヤやい  
櫻丸何をうつかり。一時も早く宮を法皇  
の御所へ御供申せ。立田殿は刈屋姫を御  
同道は必ず無用。ナ合點か。コレサ土師  
の里の親元へ。急度お預けなされよと表  
を立てて。地ッ心は情。地立田が持たせ  
し乗物へ菅丞相を召しかへさせ。後と先  
とは警固でかため御乗物はゆるやかに。  
常の旅行同然に輝國が引添うてッ土師  
の里へと急ぎ行く。地ナウこれ父上。丞  
相と宮諸共に駆け行き給ふを櫻丸が引留  
め。立田が押さへてッ引きわくる。地  
名残盡きせぬ妹脊の別れ。おふぎの別れ  
とさすが又。姉が情で引合はす。いとど  
思ひは増井の涙目は泣き。地らす赤井の  
水。いつか安居と逢坂の水のあはれや泣  
別れ。さらば。さらばと三重へ聲残る。地菅  
丞相の御別れ対面ありたき覺壽の願ひ。

流人預かる判官代輝國の用捨を以て。河内の屋敷へ入り給へば。老の悦び大方ならず馳走の役人夜晝の。フシ分ちも知らぬ忙しさ。立立田の前は船場にて思はず逢うたる刈屋姫。密かに伴ひ歸れども家來も多くは知らぬがち。隠し置いたる小座敷の襖をそつと押開き。詞嚙淋しからう精も盡けう。顔見に來たいは山々なれど。さりとは何やかや用事の多さ。母様の傍離されねばえ參らぬ。今がよい際誰も來ぬ氣晴しにサア爰へと。地心遣ひも姉妹の姉の情を刈屋姫。一間を出づるフシ日は涙。地齋世様に別れてより段々お世話に預かる上。父上様にもお目にかゝりせめて不孝の申譯。それも叶はぬ物ならばと。我が身の覺悟極めても。生の母様覺譯様。今の母様都の弟親王様の御事は。猶しも忘れぬ得忘れぬ。心を推量してフシたべと歎けば。共に涙ぐみ。詞悲しい

は道理々々。さりながら丞相様に逢はぬとて。短氣な事などかんまへて思ひ出しても下さんすな。母様のお願ひ立つて此屋敷に御逗留。どうぞ首尾を見繕ひ母様のお耳へ入れ。お指圖請けてと餘所ながら。口むしりかけて見たればな。こちらの思うた坪へはいかず母様の堅くろしさ。お果てなされた郡領様に少しもかはらぬ行儀作法。我が産んだ子でも人にやれば。先こそ親なれこちは他人。地それを親ぢやの娘ぢやと思ふは町人百姓の。譯をば知らぬ子に甘さと。幸先悪い訴訟もならず。外の事に言ひ紛らし其場は濟んでも始終が濟まぬ。詞お宿申すも今日で三日。暴風空も吹き晴れて。下り日和に直つたと船場から注進故。今宵八つがお立とて。輝國殿の旅宿より知らせによつてお立ちの用意。今やなんどと思ひの外手詰になつたがどうして好からう。地膝

とも談合コレ泣かずと。よい智恵出して下さんせと。フシ取つつ置いつの胸算用。地後にすつくと宿彌太郎。詞よい分別者これにあり。ヤア太郎様いつの間に。ムム何時の間にはコレ立田。連れ添ふ男の目を抜いてこつそりと取込んで。だいそれた身の上咄。刈屋姫はそなたが妹。薬の上から養子の仔細。知つてはわれど京と河内。武家と公家とは位も格別。昔丞相の伯母風吹かし。架めかしてもいつかなめかれぬ位負。名計り聞いて逢うたは今てんと御器量。齋世とやら様とやらが現様にならしやつたも道理ぢや。刈屋姫の顔見ぬ先はおれが楊貴妃ぢやと思うたが。較べて見れば無楊貴妃。そなたの名も變へねばならぬ。ソリヤ又何とへ。ハテ知れたお次の前。エ、すはく〜と出放題。地母様へも隠してゐる。この譯何ともいはいしやんすな。詞それは氣遣ひし

給ふべからず。明日のお立知らされし輝國の旅宿へ参り。此間御逗留心づかひの一禮申し。いよゝ刻限相違なく一番鶏の鳴くのが相圖。申し合せに往て来いと覺壽の云付。只今参る道でよい思案が出たら。コレ戻つていはうお次の前。

アレまだじやらゝ悪戯口。ヲツト閉口往て来うとヲシ表の方へ出でて行く。

身の上の事に取紛れ。御挨拶も得申さぬ。

ア、これ挨拶はいつでもなる事。こちらの願ひは延されぬ。ア、どうがなと案じ類ひヲ、それゝ。阿所詮母様にいうたとて埒のあかぬは知れてある。連合も留守。母様もお傍にごさらぬ折柄なれば。お前を私が連れて往て。ア、何られうがどうならうが後は儘いな。サアこなたへとヲシ姫の手を取る後より。阿不孝者どつちへ行くと。阿懐くわらりと母の覺

薄杖振上げて飛びかゝるを。立田ははつと抱きとめ。お前に明けていはなんだ隠したお腹が立つならばこの立田。打ちも擲きもなされませぬ。この中も宜はぬか。

阿人にやれば我が子でないと仰しやつての折檻は。母様とも覚えませぬ。阿丞相様の御秘藏杖棒あててよいものか。サア自らをゝと姫に代つて身を厭はず。

イヤお前に科はない不孝な自ら打ち給へ。と。立田を押遣る杖の下イヤゝお前は打たされぬ。イヤこな様はと折檻の杖を

争ふヲシ姉妹思ひ。阿老母は猶も怒りの顔色。阿コリヤ立田おりや他人には折檻せぬ。養子にやつた丞相殿はおれが爲には甥の殿。子にやつた姫は甥孫。親も敵さぬいたづらして。大事のゝ甥の殿流され給ふは誰が業。憎うてゝコレこ杖折れる程擲かねば丞相殿へ言譯立たぬ。阿六十に除つて白髮天窓。連合に別

れた時刺るを刺らさぬ立田の前。阿尼になつては便りがない。力がないと留められて法名ばかり覺壽と呼ばれ。邪魔に思つたこの白髮今日といふ今日役に立田。

天窓を刺つて衣を着れば打擲の杖は持たぬわい。阿傍杖望む立田からと走り寄つてちやうゝ。打たるゝ姉妹打つ母もスエ共に。涙の荒折檻。阿、これゝ

伯母御前率爾の折檻し給ふな。齋世の君の御不便ある娘に疵ばし付け給ふな。父をゆかしく慕ひ来る。刈屋姫に對面せん。

阿これへ伴ひ給はれと障子の内より丞相の。御聲高く聞ゆるにぞ。老母は杖をかりと投げ捨て。わつと叫んで伏し轉び暫し。答もなかりしが。阿生の親の打擲は養ひ親へ立つる義理。阿養ひ親の慈悲心は生の親へ立つる義理。あまき詞も打擲も。子に迷うヲシたる親心。阿逢うてやるとは姫よりも母が悦び。阿に言ひ

盡されぬ。詞刈屋姫。結構な親持つた。地持つた〜と目に持つた涙の限り聲限り。二人の娘は何事もお慈悲〜とばかりにてッ泣くより外の事ぞなき。コレ詞なう委から禮をいはうより。来いとあればいさ傍へと。地隔ての襖押明くれば菅丞相は見え給はず。逗留のうち作られし主の姿のッシ木像ばかり。地コハそもいかにと刈屋姫。逢うてやらうと宣ひしは母様の折檻を留めん爲。とにかく不孝な自ら故お逢ひなされて下されぬか。詞今物を仰しやつたは父上に違ひはないに。木で作りし父上様が但しは物を宣ひしか。地又は何所ぞへ隠れてかと。立つて見居て見ッシうろ〜。詞なう騒がしい刈屋姫。丞相の逗留中。御馳走申すは奥座敷へは餘程間敷も隔たり。さき程聲のかゝつた時爰へはどうしてござつたと思ひながら。嬉しさに辨へなく見

れば此木像ばかり。次手ながら刈屋姫咄して聞かさう。逗留の中に主の像。描いてなりとも作つてなりと。伯母が形見に下されと願うた日から取りかゝり。初手に出来たは打破り捨て二度目に作り立てられしを。同じく是も打破き。地三度目に此木像作り上げて仰しやるには。詞前の二つは形ばかり。精魂もなき木偶人。是は又丞相が。魂残す筈とて下されし主の姿。地物をいふまいともいはれず。帝への恐れあれば。逢ひたうても逢はれぬ親子。木とな思ひそ刈屋姫。地物仰しやつた父上に逢やつて嘸嬉しかろ。母も本望遂げましたと親子三人悦びの。中へのさ〜ッ立歸る。地太郎が爺親士師の兵衛。詞覺壽これにおはするか。お客人のお立も明朝出立の拵へさぞ取込。役に立たずとお見舞申し手傳ひでも仕らうと。参りがけに輝國殿の旅宿へもちよと付届

け。悴が幸ひ居り合々。用意も大かた出来たと聞き先づは大慶。左右するうちも暮相。一先づ歸つてお立の時分又参るのもお足なれば。お邪魔ながらこれにをろ。心づかひなし下されな。詞兵衛殿の義理々々しい。嫁子の所は内同然斷りに及ぶ事か。用があらば遠慮なく仰しやつたがよいわいの。刻限迄はコレ立田。そなたの部屋にお寐間をとりや。地後程お目にかゝらんとッ姫を連立ち入り給へば。地後は親子が小聲になり。詞コリヤ道々隠し合した通り太郎ぬかるな。氣遣ひなさるな親人と。地奥と部屋とへ別れ行く座敷々々は燭臺照らし。今宵限りの御奔走ととり〜騒ぐへばかりなり。地士師の兵衛は一間よりそつと抜出で前裁の。勝手覚えし切戸口錠捻ち切つて押開けば。外から相圖の挾箱差出す中間徒若黨。詞コリヤいや言付けた人数の装束。

丞相を迎ひの張典。すはといふ時間に合せと。家來共先へ歸し挾箱引ん抱へ。月影漏るゝ木の間くうそくゝ窺ふ同腹中。親人お首尾は。件の物は参りしか。悴氣遣ひ仕るな。コリヤ此中に計略のかの。池の邊でさやく親子。宵から素振に氣をつけて。宿禰太郎に目合せず。立田の前が物陰より聞くと知らず宿禰太郎。先程お聞きなされる通り。判官代輝國迎ひに参るは八つの上刻。時平公よりお頼みの。昔丞相殺す工面。贖物仕立て迎ひと偽り。受取つて途中でぐつ。とはいふものの。一番鶏がうたはねば。姑の片意地名残惜んで渡されまい。鶏の鳴かぬさきに宵鳴る鶏。これにあるかと挾箱より取出し。白相國。とさうするうちもう夜半。一團子ははり上げ存分にうたうてくれ。一

聲聞かぬば落付かぬ。親人なぞ鳴きませぬの。イヤ其分では鳴かぬ筈。宵鳴は天然自然極めては鳴かぬもの。それを鳴かすが秘密事。大竹の中へ熱湯を入れ。其上にとまらすれば。陽氣の廻るを時節と心得時をつくる。留竹も挾箱に入れて来た。湯子の湯も沸つてあろ。釜ぐちそつと取つて來い。宵、取つて來るは易い事。湯を仕かけて鳴かぬ時は。ハテぐどく。鳴かぬ時は又分別と親子が奸計。南無三寶一大事。先へ廻つて母様へお知らせ申してイヤさうしては。イヤはいでは又こちらが。いうてはあちらがこちらがと。心迷ひし胸撫下し。宿禰様。太郎様は何處にと。尋ねる聲にはつと二人が腹忘怪顧。鶏隠す挾箱。あたふた締めて左あらぬ風情。ア事々しう呼立つるは。何ぞ急な用でもあるか。さもない事なら不慮慮千萬。親

人もこの宿禰も。肝にこたへて悔りしたと。いふ顔つれく打眺め。お前方面の悔りより。わしに悔りさしやんした。聞えぬ連合勇君。贖迎ひを拵へて昔丞相様殺さうとは。あなたに何ぞ恨みがあるか。但しは時平に頼まれし欲には馴染の女房も捨て。母様の義理も思はずか。お前捨てる心でもわしや得捨てぬ太郎様。コレ申し親父様思ひ止つて下さりませと。舅を拜み夫を拜み。聲も得立てぬ貞女ヲシの思ひ涙。操を顯はせり。兵衛は宿禰に詢し。イヤはや親身の意見に逢うて。親も悴も面目ない。向後心改める。嫁女此事聞流しにア、勿體ない。聞き流さいでよいものか。御得心とあるからは。此世ばかりか未來迄かはらぬ夫婦勇君。まだ二月の餘寒も烈し。炬燵に腐温め酒。一つ上げたイヤお出でと。先に立田がそれそこを。心得太郎が

後髪(うしろかみ)を肩(かた)先(まへ)四(よ)五(ご)寸(すん)切(き)られながら。振返(かえり)つて掴(つか)み付き。同(どう)エ、これ人でなし卑怯(ひじやく)者(もの)。一人(ひとり)の手(て)にも足(た)らぬもの。撒(な)し殺(ころ)しが本望(ほんぼう)か。地色(ぢしき)女(に)の義理(ぎり)を立て過(か)し悔(く)しや無念(むねん)と罵(のの)る聲(こゑ)。おとねを立てなと宿禰(すくね)が下着(げさく)。襟元(えりもと)口(くち)へ押(お)込み捻(ねじ)伏(ふ)せ肝(かん)先(まへ)ぐつと。フシ一(ひと)割(わり)り。地兵衛(ぢべゑ)は前後(ぜんご)に心(こゝろ)を配(くわ)り。

悴息(せき)は絶(た)えたか。氣遣(きぢ)ひ召(ま)すな只(ただ)今(いま)といめ。さて此(こゝ)死骸(しかい)は。問(と)ふに及(およ)ばぬこの大池(おほいけ)。地骸(ぢがい)を浮(う)さぬ手(て)ごろの石杖(いしづゑ)や帯(おび)に括(くわ)り添(そ)へ。深(ふか)みへやれと二人(ふたり)して投(な)り込(こ)む。死骸(しかい)は紅(べに)の。血(ち)汐(しほ)に染(ぬ)まる池(い)までも。フシ立田(たちだ)が名(な)をや流(なが)すらん。コレ同(どう)親(おや)人(ひと)。これはこれでも濟(な)まぬは鶏(と)り。臺子(たいす)の湯(ゆ)を取つて參(ま)らう。太郎(たろう)それにはもう及(およ)ばぬ。鳴(な)かす仕様(しやう)は身(み)共(ども)に任(ま)せと。地武士(ぢぶし)の嘴(くちばし)懐(なつか)中(ちゆう)松明(しょうめい)手(て)ばしかく燈(あ)り立(た)て。池(い)の中(ちゆう)へ明(あ)りを見(み)せ。挾箱(けつげう)の蓋(かぶ)あをのけ鶏(と)を上(う)に乗(の)せ浮(う)める池(い)の水(みづ)の面(おもて)。刀(た)の鍔(つば)差(さ)延(の)ば

す腕(うで)一(ひと)ばいに押(お)遣(つか)れば。動(うご)かぬ水(みづ)も夜風(よかぜ)に立(た)つや小波(こなみ)のうねりにつれ。フシ半段(はんだん)ばかり流(なが)れ行(い)く。同(どう)親(おや)人(ひと)何をなさるゝ事(こと)。挾箱(けつげう)の蓋(かぶ)を船(ふね)にして。子供(こども)のする業(わざ)おとなげない。あれが何(なに)の役(やく)に立(た)つハ、。譯(わけ)を知らずば言(い)うて聞(き)けう。總別淵川(そうべつえんがわ)へ沈(しづ)んで知(し)れぬ死骸(しかい)は。鶏(と)を船(ふね)に乗(の)せて尋(たず)ねれば。其(その)死骸(しかい)のある所(ところ)で時(とき)をつくる。鶏(と)の一德(ひと)思(おも)ひ出(で)し。池(い)へ沈(しづ)めた立田(たちだ)が死骸(しかい)。今(いま)一(ひと)役(やく)に立(た)てて見(み)るうまい手番(てばん)。拍子(ひょうし)まんが直(ちやう)つて來(き)た。地(ぢ)あれく太郎(たろう)羽(は)たゝきするは死骸(しかい)の上(うへ)か。そりやこそ鳴(な)いたは東天紅(とうてんこう)アリヤ又(また)うたふは東天紅(とうてんこう)。

八(や)つにもならぬ宵鳴(よな)の聲(こゑ)さえかへる春(はる)の夜(よ)。庭木(にわぎ)の時(とき)に羽(は)たゝきして一(ひと)鶏(と)鳴(な)け。ば萬(ま)萬(ま)鶏(と)うたふ。函谷關(わんこく)の關(かど)の戸(と)も。フシ開(ひら)く。心地(こゝろ)に親(おや)子(こ)が悦(よろこ)び。同(どう)これから急(いそ)ぐは菅丞相(すがしやう)相(さう)。迎(むか)ひの拵(ぎ)へ氣(き)がせくと。地兵衛(ぢべゑ)は出(で)て行(い)く切戸口(きりどぐち)。宿禰(すくね)太郎(たろう)はたくみ

の仕殘(しざん)しオクリだめを。フシ聞(き)かして入(い)りにけり。地(ぢ)早(はや)や刻限(こくげん)ぞと御膳(ごぜん)の拵(ぎ)へ。銚(しやう)子(こ)土器(どき)腕(うで)斗(と)昆(こん)布(ふ)腰(こし)元(もと)共に島臺(しまたい)持(も)たせ。伯母御(はくぼご)フシ座敷(ざしき)へ出(で)て給(たま)ひ。同(どう)百(ひゃく)日(にち)夜(よ)留(とど)めたりとも。別(わか)るゝ時(とき)は變(か)らぬ辛(から)さ。地(ぢ)此(こゝ)上(うへ)頼(たの)むは御免(ごめん)の勅諭(ていごん)。歸(かへ)洛(らく)をまつこの島臺(しまたい)行(い)末(すえ)祝(いわ)ふ腕(うで)斗(と)昆(こん)布(ふ)。菅丞相(すがしやう)も此(こゝ)聞(き)心(こゝろ)遣(つか)ひの御(ご)一(ひと)禮(らい)。スエテ互(たが)いに盡(つ)きぬ御(ご)名殘(なざん)。

宿禰(すくね)太郎(たろう)罷(ま)り出(で)て。同(どう)御(ご)立(た)の刻限(こくげん)とて早(はや)や門前(かどまへ)まで迎(むか)ひの官人(くわんにん)。判官代(はんぐわんだい)輝國(きくに)は路(みち)次の用心(しんご)辻固(つじかた)め。只(ただ)今(いま)旅宿(りょしゆく)を立ち申(まを)され。興昇(きやうせい)の官人(くわんにん)に譜代(ふだい)の家來(けらい)を相(あ)添(そ)へられ。地(ぢ)色(しき)只(ただ)今(いま)これへ參(ま)上(じやう)と怪(あや)しの張(は)興(きやう)昇(せい)入(い)れて。時刻(じこく)移(うつ)るとせり立(た)つる。菅丞相(すがしやう)は悠(ゆう)と大廣間(おほひろま)より出(で)させ給(たま)ひ。輿(こし)に召(ま)すまで見(み)送(おく)る老母(らうぼ)人(ひと)前(まへ)作(しやく)つてにこゝと。フシ泣(な)かぬ別(わか)れぞ哀(あは)れなる。地(ぢ)宿禰(すくね)太郎(たろう)も御(ご)見(み)立(た)て門(かど)送(おく)りして立(た)歸(かへ)り。同(どう)ヤレ嬉(うれ)しや仕舞(しやまひ)が付(つ)いた。覺(おぼ)覺(おぼ)様(さま)もお氣(き)休(やす)め。



寐間へござつてイヤ寐たうても寐られぬわいの。寐られぬとは御氣色でもアレしたいの。客を立てて嬉しいと。一道な聲殿の悦び。一つ屋敷にのみながらの暇乞も得せいで。刈屋姫が悲しがる。人の逢ふのも羨がる。かけ橋はぬ立田さへそれで態と呼出さなんだが。機嫌よう立たしやつたを悦びにはなぜ來ぬぞ。誰ぞ行て見てこいと。ぬいふにきよろつく宿禰太郎。フッ腰元どもは立戻り。詞奥にござるは刈屋姫只お一人。立田様はござりませぬ。何ぢやいぬ。内を放れてどこへいきやろ。ぬ今一度見てこい座敷の隅々かくれん。尋ね〜と吟味の厳しさ。提燈手んに若黨中間幾人あつても行き届かぬ。花壇築山手分けて尋ねる奥の池の端。芝に溜つた生血を見つけコリヤ〜此血の流れ込む。池を捜せと聲々に。水心得た奴共飛込み〜水底より。

かづき上げたる立田が死骸。フシ驚き騒ぐ家内の騒動。太太郎は鼻も動かさず。詞殺した奴は内にある詮議濟む迄門打つて。家來共動かすなと。喚喚きちらせば母覺壽姫もかしこへ轉び出で。コハ誰人の所爲ぞや。先からお顔を見なんだは。伯母様のお傍にと思ひ設けぬこの死骸。父上には生別れお前には死別れ。時もかはらず日もかはらず。悲しさつらさ一時に。かゝる例もある事かと。スエテ老母に取付き。悔泣。ヲ、詞道理々々。そなたはおれが傍にと思ひ。おれはそなたが傍に居ると思ひ違ひが娘が不運。母が因果でおぢやるわとかつばと伏して正體なし。太郎傍へ立寄つて。詞涙が死人の爲にはならぬ。女房どもへの追善には殺した奴をひつぱり切り。これにて詮議仕らんと縁端に大胡座。男女に限らず家來のやつばら片端から詮議する。マアとつ

付にをる宅内め。身が前へ出あがらう。ナイ〜ないと。御前にかつ躡ひ。詞人は知らず拙者めにお疑ひはござない筈。お死骸を取上げた。御褒美を下されうで一番にお呼出し。忝い義でござりまするでござります。ヤア禍々しい褒美とは横着者め。立田が死骸池にあるを汝はどうして知りをつたそれ吐かせ。イヤあの尻も天窓も見やう筈はござりませぬ。池の深みへ芝から傳うた血を證據にヤアぬかすな。提燈の灯明で。それがそれと知れるものか。うぬが殺して沈めた池。外の者がどうして知らう。血の分では言譯立たぬ。これはお旦那無理おつしやる。言譯立たうが立つまいが。池が血へ流れ込んだ其外は存じませぬ。ヤア池が血へ流れたとは。血迷うて何ぼさく。きやつ詮議場で水くらはせ。白状さするそれ引立てと。宿禰も續いて立つ所を老母押

止め。同イヤ責めるに及ばぬ詞のてんでん。寤しや娘の敵が知れた。ハア責めなとは天晴お目高。科極つた罪人。女共へ手向ける成敗大袈裟に打放す。腕を左右へ引張れと刀提げ立寄る宿禰。同イヤ成敗は常の科人袈裟に切つてはたゞ一思ひ。苦痛させねば腹が癒ぬ。娘の敵初太刀はこの母。跡は髻敷刀を借ると。かひくしくも袂引上げ向ふ目當は奴にあらず。油断太郎が弓手の肋骨突込む刀に室内は。ンシ命拾うて逃げて行く。彌宿禰太郎は急所を刺され悶蹙き苦しむ息の下。身どもに何の科あつて老筆めがと言はせも果てず。同覚えなといははさぬく。わが科を人に塗り。成敗をして見せて。裾はせ折つた下着の袂先切れてある。その切れはコリヤ立田が口に聲立てさせぬ無理殺し。齒を噛みしめ放さぬ袂先。切つた事を忘れ。おのれが科を

おのれが顯はす極重罪人。死骸の前で敵を取る母が娘へ手向の刀。肝先へこたへたかと大の男を仕とめる老女。流石に河内郡領の。武藝の管残されし。ンシ後室とこそ知られけれ。地や一時移れば判官輝國只今これへ御出と。家來が申すに老母は驚き。同丞相は先程お立ち誰を迎ひに。心得ぬ事ながら此方へ通しませい。刈屋姫は奥へ行きや。こいつはまちつと苦痛をさすと。地刀を其儘骸押退け。ンシ出迎へば。輝國も早や入來り。同お迎ひの刻限。御用意よくば早やお立ちと。地申す詞の先折つて。輝國殿何おつしやる。丞相の迎ひには足下の家來が先程見え。請取つて歸られたはもう一時も先の事。ヤアこれく。伯母御。身が家來に渡したとは旁以て心得ず。鶏の聲に刻限重り。只今鳴いた旅宿の鶏八つに參る迎ひの約束。家來とはいうが。直に身共が參つた

とて。刻限も來らず鶏も鳴かぬ先。渡したというては濟むまい。船がかりの其間伯母御に逢はすはこの輝國が情の容赦。今日の今になつて名残も一倍。鳥へはやらぬ渡したといへばそれで濟むと。鼻の先な女子の了簡。昔丞相の仇にこそなれ爲にはならぬ。偽りな申されそ。イヤ偽りは申さぬ。庭で鳴いた鶏の聲。そこへござつた迎ひの衆。渡したに違ひはないが。請取らぬとおつしやるので。娘が最期筆めがあのだま。思ひ合せば先刻に來たは賢迎ひ。コレ伯母御。内の騒動死人のあるうへ賢迎ひ嘘ではあるまい。識者どもの所爲であらう。一時遣へば三里の後れ。追付いて取返さんと急ぎにせいでかけ出す輝國。同ヤアく。判官先づ待たれよ。昔丞相はこれにありと。一間より出で給ふ。覺醒は悔りさつきに別れた昔丞相。そこにはどうしてく。ンシ

不審の立つも道理なり。地判官輝國打  
笑ひ。ぬけ〜とした伯母の偽り暫時  
の仰天。丞相これにまじませば輝國が安  
堵々々。目見え渡つたこの御雜儀。譯も  
聞きたし力になつて進ぜたけれど。私な  
らぬ警固の役目。地はや刻限も移りぬ  
ればいざ御立と勤むる所に。目先程見え  
た警固の役人。たつた今門前まで。何ち  
や警固がハテよい所へ戻られた。嘘つか  
ぬ覺壽が證據これへ通し。輝國殿へ見え  
ませう。イヤ身が名を銜つた賀役人。直  
に逢うては悪しかるべし。地忍んで様  
子を窺はんと丞相諸共一間の障子。フシ  
引立て内に隠れぬる。地典にさき立つ警  
固が大聲。目コレ老母。輝國の名代とけ  
侮り。とでもない物身ともに渡しようぬ  
つくりさくれたの。これは迷惑。菅丞相  
を請取りながら。とでもないとは何おつ  
しやる。アレまだぬつべり。丞相は丞相  
でも。木で作つたは此方に入らぬ。肉付  
の菅丞相。替へる氣で持つて來た木像。  
コリヤ此典にと、いふに覺壽も心付きエ  
エ忝い。さては魂を籠められし木像であ  
つたかい。猶も證據を見届げんと心の悅  
び押隠し。目此方の言分合點がいかぬ。  
其木像見せさつしやれ。ヲ、しやちこば  
つた荒木作り。地サア今見せうと明ける  
戸の輿に召したは木像ならぬ。優美の姿  
菅丞相につこと笑うて立出で給へば。警  
固はぎよつと呆れ顔。覺壽も逞ひし心當  
障子の内と今見る姿。心どきまぎ疑ひな  
がら。目ア、よう戻して下さつた。儲に  
伯母が請取りました。ヤアどこへ〜そ  
りやならぬ。ならぬとはいふもの。連  
れて歸つて見たのは木像。すりかへられ  
たと氣がついて。かへに戻つた爰ではほ  
んの菅丞相。おれが目の悪いのか。見所  
によつて變るかい。目イヤ變らうがかは  
るまいが戻された菅丞相。いざ此方へと  
立寄る覺壽。ヤアのおとと突飛ばし丞  
相を又輿に乗せ。戸を引立てて家來に向  
ひ。目わいらも様子を見る通り。いかにし  
ても怪しい事ども。此分では歸られず  
念のため家捜しすると。階込む先に宿禰  
太郎。半死半生のた打つ苦しみ。南無三  
寶太郎様が切られてござる。且那々々と  
呼ぶ聲に警固の中から親兵衛。前後も更  
に辨へず走り寄つて引起し。コリヤ悴。  
この深手はどいつが所爲。フシ相手を  
らせと氣をせいたり。目なる兵衛殿相手  
は姑ア、私が手かけた。ヤア掣を手に  
かけ落着き自慢。何科あつて身が悴をヤ  
アとばけさしやんな。地殿。そいつが立  
田を殺した時。こなたも手傳ひ仕やろが  
の。娘の敵切つたが何と。賀迎ひの棟梁  
殿。何もかも顯はれ時。さつぱりとい  
た〜。エ、残念々々。悴めが出世を思

ひ。時平公に一味して菅丞相を殺さん爲。鶏に背鳴させ。十が九つ仕終せた兵衛が方便。無腐り遂めに喚き出され殺された悴が敵。覺悟ひろげと飛びかゝるをヤアさはさせじと判官輝國。小蔭より顯はれ出で覺壽を圍うて突つ立つたり。ヤアどなたが出てもびくともせぬ。兵衛がたくみの破れかぶれ死物狂ひの働き見よと。切つてかゝればかいくどり持つたる刀踏み落し。利腕掴んで引つくりかへし。足下に踏付け大音上げ。同ヤア輝國が家來共。賢者めらを片端から括れ〜といふ聲に。始の擬勢ねけ〜にフシ一人も残らず逃失せたり。無覺壽はとつかは輿の戸の明くる間さぞやお氣詰りと。内を見ればこはいかに筐の木像又悔り。これはいかにと立歸りこなたの障子押明くれば。伯母御躡がせ給ふなど。菅丞相の御詞。爰でも悔り彼處でも。悔りびく

りに心の迷ひ。どちらがどうちや輝國殿目利なされて下されと。問はるゝ人も問ふ人も、ン呆れ果てたるばかりなり。無承相重ねて。輝國の迎ひ遅參故。睡むともなく暫時の間。物騒しく聞えし故親ひ見れば。兵衛がたくみ太郎が所爲。輝立田の前ははかなき最期是非もなし。伯母御の心底さこそ〜。某これへ來らずはかゝる歎きもあるまじと今更悔みの御涙。同イヤ娘が命百人にも。替へ難き大事のお身。怪我過ちのなかつたを悦びこそすれ何の泣こ。何の〜といふ目に涙。なう輝國殿。悪事の元はその兵衛。此世の暇を早う〜。太郎も共にと立寄つて鬚引上げ。丞相の堅固の有様。おのれ親子に見せたが本望。娘が恨みも晴れつらんとフシ刀を抜けば息絶えたり。同へエ憎いながらも不便な死さま。有朝爲轉變の世のならひ。娘が最期も此刀。

鞆が最期も此刀。母が罪業消滅の白髪も同じく此刀と。取直す手に鬚拂ひ。同初孫を見る迄と。貯ひ過した耻白髮。孫は得見いで憂目を見る。娘が菩提。無逆縁ながら弔ふこの尼。種々因縁而求佛道。南無阿彌陀佛と唱ふれば。菅丞相も唱名の。聲も涙にフシ回向ある。判官輝國大きに感じ。伯母御前に先とられ跡に退つたおのれが成敗。強欲非道の鐵頭と水もたまらず打落す。覺壽は木像抱き拘へ菅丞相の右手の方。御座を並べて直し置き。同兵衛親子がたくみも顯はれ。何も彼も納まりし。この木像の不思議な働き。かるゝ例もフシある事かや。同いやとよ最前もいふ如く。匹夫々々がたくみも顯はれ。我が急難を遁れしも暫時の睡眠前後を知らず。木に彫み筆に畫く。例は本朝名高き繪師。巨勢の金岡が書いたる馬は。夜な〜出でて萩の戸の萩を喰ひ。

は。夜な〜出でて萩の戸の萩を喰ひ。

唐土にも名畫の譽、吳道子が墨繪の雲龍雨を降らせし例もあり。また神の尊像木佛などの。人の命に代らせ給ふ例はかぞへ盡されず。詞管相丞が三度まで作り直せし物なれば。木にも魂備はつて我を助けしものやらん。妻其詞證者の爲に罪せられ。地身は荒廢の。ギン鳥守と。朽ち果つる後の世まで形見と思し召されよと。ナホス仰せは外に荒木の天神。河内の土師村道明寺に、フシ残る威徳ぞ有難き。輝國四方を打眺め。思はざる儀に隙を取り。夜も明けはなれ候へば御立ぞふと申すにぞ。ハルシ又改むる。暇乞。伯母が寸志の錢別せん用意の物こなたへと。刈屋姫の上着の小袖かけたる伏籠詰共に。フシ御傍近く取直させ。浪風荒き楫枕餘寒を凌がせ申さん爲。伯母が心をたきしめた小袖を鳥まで召さるゝ様に。輝國のお世話ながら、ヌエテ頼み。まする

とありければ。これは宜しき進ぜ物。香防ぐとめ木の小袖家來に持たせ參らんと。立寄り伏籠に手をかくる。承相しはしと止め給ひ。御恩を厚く籠め給ふ伏籠にかけし此小袖。中なる香はきかねども。名は大方伏屋か刈屋。伯母御前より道眞が。申請けし女子の小袖。我が身にはあはぬ筈。身幅も狭き罪人が此儘にお預け申す。わが小袖と思しめし。立田の前が追善の。佛事も共にと伯母御前の心を悟る御詞。骨身にこたへ忍びかね思はずわつと聲立てて。歎くに扱はとフシ輝國も心を。感じ萎れ入る。覺暮の心は伏籠の内。泣いたは結句あの子が爲。別れにちよつと只一目伯母が願ひを叶へてと。立寄る袖を引止め。年故のそら耳か。今鳴いたは慥に鶏。あの聲は子鳥の音。子鳥が鳴けば親鳥も。

隠し歌。鳴けばこそ。別れを急げ鶏の音の。聞えぬ里の。曉もがたとフシ詠じ捨て。名残はつきすお暇と立出で給ふ御詠歌より。今この里に鶏無く羽たゝきもせぬ世の中。や伏籠の内をもれ出づる。姫の思ひは羽ぬけ鳥。前後左右を圍まれ。父は元より籠の鳥。雲井の昔。忍ばるゝ。左遷の身の御歎き。夜は明けたれど心の闇路。照すは法の御誓ひ。道明らけき寺の名も。道明寺とて今も猶榮えまします御神の生けるが如き御姿爰に残れる物語。盡きぬ思ひにせきかねる涙の。玉の、木槲樹。珠數の数々くりかへし。歎きの聲に只一目見返り給ふ御頼ませ。これぞ此世の別れとは知らで。別るゝ別れなり

### 第三

人の身の噓種。菅丞相の舍人梅王丸。主君流罪なされてより都の事ども取附ひ。

御臺のお行方尋ねんと笠ふかふかと深緑。フシ手の並木にさしかゝれば。

向うからも深編笠我に遠はぬその扮装。互にそれぞと近く寄り。梅王丸か。こ

れはく櫻丸。ヤレそちに逢ひたかつた。マア咄す事聞く事ありと兄弟木蔭に笠

傾け。御扱先づ問はう其方は日外加茂堤より。宮姫君の御跡慕ひ尋ね行きしと。

内方八重の物語。何とお二方に尋ね逢うたか。成程道にて追付き奉り。菅丞相

流罪と聞くより對面なさしめ奉らんと。安居の岸迄御供せしに御對面叶はず。輝

國殿の計ひにて。御歸洛願ひの妨げとお二方の御縁も切られ。姫君は土師の里伯

母君の方へ御出で。齋世の宮様は法皇の御所へ供奉し奉り事治りしといひなが

ら。納まらぬは我が身の上。冥加に叶ひ

お車を引くそのあり難い事打忘れ。賤しい身にて戀の取持終には御身の仇とな

り。宮御謀叛と讒言の種拵へ。御恩請けたる菅丞相様流罪にならせ給ひしも。

皆この櫻丸がなす業と思へば胸も張裂く如く。今日や切腹。明日や命を捨てうか

と。思ひ詰めは詰めたれど。副佐太におはする一人の親人。今年七十の賀を祝ひ。

兄弟三人嫁三人。並べて見ると當春より悦び勇みおはするに。我一人缺ける

ならば不忠の上に不孝の罪。せめて御祝儀祝うた上と詮なき命けふ迄も。ながら

へる面目なき推量あれ梅王と。拳を握り齒を喰ひしめ。先非を悔いたるその有様

梅王も理とフシ暫し詞もなかりしが。ヲ、御道理々々。我とても主君流罪に逢

ひ給ふ上は。都に留まる筈なけれど。御館没落以後御臺様のお行方知れず先づ此

方を尋ねうか筑紫の配所へ行かうかと取

つ置いつ心は逸れど。其方が言ふ如く。年寄つた親人の七十の賀の祝ひもこの

月。これも心にかゝる故思はず延引。互に思ひは須彌大海。是非もなき世の有

様と。兄弟顔をフシ見合せて涙。催す折からに。鐵棒引いて先拂ひ先退いて片

寄れと雑色がいかつ聲。梅王立寄り何人ぞと尋ねれば。本院の左大臣時平公吉

出への御參籠。出しやばつて鐵棒くらふなとフシ言捨てて急ぎ行く。何と

聞いたか櫻丸。齋世の宮菅丞相を憂目に逢はせし時平の大臣。存分いはうちやあ

るまいか成程々々。よい所で出つくはしたと。兄弟道の左右に別れ。尻引差げ

身構へしフシ今や來ると待ち居たる。程なく轟く車の音。商人旅人も道をよぎ

る時平の大臣が路次の行粧。さながら天子の御幸のごとく。隨身侍前後に列し

大路。狭しとフシ緩せたり。兩人木蔭を

飛んで出で車やらぬと立塞がる。同ヤア  
 何者なれば狼藉すると顔を見れば松王が  
 兄弟。梅王丸櫻丸。ム、聞えた。主に離  
 れれ扶持に離れ。氣が違うての狼藉か。但  
 しは又此車時平公と知つてとめたか知ら  
 いでとめたか。返答次第兄弟とて容赦は  
 せぬと。白張の袖まくり上げ掴みひしが  
 ん其勢。梅王丸似非笑ひ。ヤア同いふ  
 なく。氣も遠はねばこの車見遠へもせ  
 ぬ時平の大臣。齋世親王首丞相鎌倉によ  
 つて御沈落。その無念骨髓に徹し。出逢  
 ふ所が百年目と思ひ設けし今日只今。櫻  
 丸とこの梅王牛に手馴れし牛追竹。位自  
 慢で喰ひ肥えた時平殿の腕。二つ三つ五  
 六百くらはさねば堪忍ならぬ。いはれぬ  
 主の肩持顔出しやばつて怪我ひろぐな。  
 ヤア法に過ぎた案外者。アレぶちのめせ  
 引括れと。同供の侍聲々に前後左右に  
 追取巻く。兄弟は事ともせず。取つては  
 投退け掴んではぶち付け  
 投退ければフシ傍に近  
 付く者もなし。松王焦つ  
 て。ヤア同命知らずのあば  
 れ者。いづれもお構ひあ  
 るな。御主人の目通り御奉  
 公は此時節。兄弟と一つで  
 ない忠義の働きお目にかけ  
 せん。コリヤやい。松王が引  
 きかけたこの車とめらるゝ  
 なら留めて見よと。鼻づ  
 ら取つて引出す車。ホ、ウ  
 同櫻丸梅王丸爰になくばい  
 さ知らず。一寸なりとやつ  
 て見よと。同兩人腕に手を  
 かけてエイ〜と押戻  
 せば。牛も四足を立衆ねて  
 跡へ〜とフシカ、退り行  
 く。松王車の後方へ廻り。兩



手をかけて力足やらんやらじの評ひは。世にも希なる三つ子の舍人互に劣らぬ主思ひ。ナホス命限り根限り造つつ戻しつ引合ふ車。大地は薬研と掘穿ち土ににえ込む車の轍。ヤア面倒な畜生めと。靱を放せば逸散に牛は離れてフシ馳けり行く。車の内ゆるぐと見えしが。御簾も飾りも踏折りく踏破り。顯はれ出でたる時平の大臣。金巾子の冠を着し天子にかはらぬその粧ひ。赫々たる面色にて。ヤア牛扶持くらふ青蠅めら。轍にとまつて邪魔ひろがば。轍にかけて敷殺せ。ヤアさいふ大臣を敷殺さんと。二人が力に車を指だめ。引繰りかへすを返されじと。捻合ふ松王右へ押せば左へ押し。上げつおろしつ二三度四五度。爰を先途と揉合ひしはフシ祭の神輿に異ならず。は上より金剛力。どうど踏んだる其響。車も心木も粉微塵。碎けし轍を踏々提げ

大臣を打たんと振上げる。ヤア時平に向ひ推参なりと。向ひ推参なりと。千世界の千日月一度に照すが如くにて。追の梅王櫻丸。思はず跡へたちく五躰すくんで働かず。計りなり。何とわが君の御威勢見たか。此上に手向ひすると御目通りで一討と。刀の柄に手をかくればヤア松王待てく。と。車より飛んでおり。金を巾子の冠を着すれば天子同然。太政大臣となつて天下の政を執行ふ時平が。眼前血をあへすは社参の穢れ。助けにくい奴なれども下郎に似合はぬ松王が働き。忠義に免じて助けてくれる。睨んで進み行き。めらとフシ邊を。睨んで進み行き。返返つて松王丸。よい兄弟を持つて兩人共に仕合者。命を拾うた有難い忝いと三拜せよと。いはれて兩人くわつとせき上げ。汝にも言分あれども。親人の七

十の賀祝儀濟む迄。ナウ梅王。ヲ、其上では松の枝々切折つて敵の根を断ち葉を枯らさん。ヲ、それは此松王も親父の賀を祝うた跡で。梅も櫻も落花微塵。足元の明い中早く去れく。ヤア推参な歸るをおのれに習はうかと。兄弟三人。互に残す意趣遺憾睨んで。左右へ三果別れ行く。ハムン春さきは。在々の劔劔迄も樂々と。遊びがちなる。一番村では年古き人に知られし四郎九郎。律義一遍取得にて菅丞相の御御分。佐太に手輕き下屋敷お庭の掃除承はり。松梅櫻御愛樹に培ひ水の養ひも。根が農りの劔仕事我が身の老木厭ひなく。幹をこやし百姓業の世話より氣樂なり。堤端の十作が劔打ちかたげ門口から。四郎九郎殿内にかと道入るを見付けこりや十作畑へか。イヤ今仕舞うて戻つたりや蟬がいふには。何やら目出たい祝ひ




ちやてて。大きな重箱に眼へはひるやうな餅七つ。朝茶の鹽にも喰足らねど貰はぬよりも忝い。禮もひいたし。祝ひとはマア何でござる。サイノ。昔丞相様のふつて湧いた御難儀。お下に住むおらゝが身祝ひ所ぢやなけれど。爲にやならぬさかいで爲るは爲るが。世間へも遠慮があつて。彼岸團子程な餅七つ宛配つたは。この四郎九郎丁七十。この春年頭のお禮に上つた時おらが年をお尋ね。七十と申したりや。古來稀な長生。其上珍らしい三つ子の爺親。禁裏から御扶持下され。悴共は御所の舍人目出たい。産れ月産れ日。産れ出た刻限違へず七十の賀を祝へ。其日から名も更へとて。ナウ聞かしやれ。伊勢の御師か何ぞの様に白大夫とおつけなされた。則ち今日が誕生日。白黒まんぢらかいは掃溜へ投つて退け。地今日から白大夫といふ程にさう心得

下され。問それは目出たい。序ながら問ひましょ。三つ子産むと扶持下さる。其間も聞かしやつたか。サイノ死んだ女房が産んだ時は邊り隣りの外聞。ひよんな事ぢやと思つたが勿怪の幸ひ。三つ子の爺親一代は作り取りの田地三反。日本ばかりぢやないげな。唐迄もさうぢやて。男の子なりや御所の牛飼。女郎なれば東童とやら是も御所でつかはるゝ。法式は忝いもの。旦那殿は流罪なれど。おらは所も追立てられず下された田地は其儘。そちの嫡も若い程に。地産ますならおらに背りやとヘルツ咄の中道。迎り來るは櫻丸が女房八重。今日は舅の祝ひ日とて風呂敷包片手に提げ。フシ嬉しや爰ぢやと笠取れば。問ホ、櫻丸が女房八重か。早かつた。外の嫁御も揃うてくるか。マア上つて抱へも解きや。アイア

イまだ皆様はお出でないか。遅かると氣がせいで。淀堤から三十石の飛乗り。船の足の早いので草臥もせず早よ来たか仕合せでござんする。コレ四郎九殿。お客さうなもう往にましょ。エ、四郎九郎とは物覚えがない十作。白大夫はや忘りやつたか。イヤ忘れはせぬわいの。餅の祝ひとは格別。名酒呑まねば何時迄も四郎九郎。ハレヤレ盛つた酒を呑まぬとは。但しはまだ呑足らぬか。合ぬけくと喰いふわちよ。おらに酒いつ盛つた。ヲ、さつきに盛つた。樽や徳利は目に立つ故。餅の上へ茶筌の先で。酒鹽打つて。マア、それで聞えた。驕が酒くさいか。問エ、それで聞えた。驕が酒くさい餅ぢやというた。外へは遠慮でさう仕やると。地おらは懇だけ。晚に來て寢酒一ばい。フシお客これにと出でて行く。問嫁女アレ聞きやつたか。今の世の人

見付けて。暖にきて寐酒たべう。ハ、ハ、ハ、きして寄る事も忘れたに。ハ、ア、せち賢い戀ぶり。イヤ又お前 お千代様とはよいお出合も餘りな地聞きも及ばぬ茶筌酒ホ、ハ、ハ、ひ。サイナお春様に逢ホ。ハ、ハ、ハ、と。ソ嫁と男の睦しさ。うたはわしが仕合せ。賑やかな道連れ。詞それはそれお春様マア先へ。イヤお千代さんから ちやが親父様。料理の拵へお春様同士の門での辭宜合。白大夫 出来てあるかえ。イヤ出来可笑しが。一時に産れた三つ子の 事はいらぬ。今朝搦いた餅嫁ども。先の後の所かい。八重がとうか で雜煮仕や。上置はしれたら待つて居やる。どちこちなしに遣入れ 昆布。隙の入れぬ様に茹でく。ほんに八重様早かつた。ござんす て置いた。大根も芋もそこる道なれば。春が所へ誘うても下さんし に有る。勝手は知るまい。よかと。待つた程が遅なはつて心せき 愚ヤアえい〜と立上れる道すがら。千代様に行合うて連立つて ば。イヤ申し。今日の祝ひくる道悪戯。今日の祝ひの浸にと嫁菜蒲 はお前が目當。料理方の出公英二人の仕業。それはよう氣がつい 来るまで。何にも構はず一た。春様誘ふ約束も。日脚の長けたに氣ぜ 寐入りなされませ。勝手に



菅原傳授手習鑑

通明寺山竹杖

上座本竹田出雲様

大月竹田本義大夫

三味線	大鼓	三鼓	二鼓	一鼓	物鼓
竹本義大夫	竹本義大夫	竹本義大夫	竹本義大夫	竹本義大夫	竹本義大夫



なく。其場はそれで済んだれども。もちやくちや云うてゐられます。春さん八重さんお前方もさうである。氣の毒な男の不機嫌。成程々々。千代さんのいはんす通り。今日の祝ひをいひ立てて兄弟御の中直し。親御のお詞かゝらいではと。フシ男思ひの壁訴訟。エ、調和御寮達に問うたらば知れうと思つた。喧嘩の筋知つてゐてもいはぬか。同じ胤腹。一時に生れた悴でも心は別々。よう似た顔を存といへど。それもそれには極まらぬ。女夫子もあり又顔の似ぬ子ある。マア大概顔が似れば心もよう似て、兄弟の中もよいものぢや。おらが悴共誰が見ても一作とは思はぬ。生ぬるこい櫻丸が顔付。理窟めいた梅王が人相。見るからどうやら根性の悪さな松王が面構。ヤ千代が傍で龜相いうた。氣にかけてたもんな。マア怪我がなうて殖しうをりやる。怪我

の序に。孫めは健なな。連れて来て顔見せいで。ヤアとかういふ中もう七つちやおれが生れたは申の刻限。料理も大かた出来たである。嫁たち膳を出さぬかい。アイ〜。刻限の過ぎるまで連合衆はなげ見えぬ。千代さん八重さん道まで往て見て来まいか。爰で待つより三人ながらござんせ往かう。ヤア噂たち何いふぞい。子供どもは來てゐるわい。アノ來てぢやとは何處に〜。エ、鈍な嫁共。そこに居るを得知らぬかい。コレ三本のあの木が子供等。梅王松王櫻丸。顔は残らず揃うてある。勿體ない背丞相様。く〜めるやうにいはしやました。生れ日の刻限が違や悪い。祝儀には陰の膳も据ゑる習ひ。サア〜。早うと白大夫が。いふに猶豫もなり難く俄に盛るやら箸打つやら。椀の向うの小皿に蹠。先づ一番に親父様これでお坐りなされませ

と。給仕は元よりならはねど見馴れ聞馴れ立振舞フシ八重が配膳御所めけり。イヤおれも彼處へいこ。イヤ土間では冷えが上ります。やつぱり爰でと押供へ。これから面々夫の給仕を捧げて庭に下り。この梅の木が梅王殿。枝ぶりずんと日頃の氣質。八重が連添ふ男ぶり。フシ木ぶりも吉野の櫻丸。ヘッシこれは千代まで添遂げる。女夫が中の若綠色も艶々勢よい。松王殿で子達も揃ふ。サア親父様。目出たうお箸。フシなされませ。ホ、詞なされうとも〜。親がひに座が高い。子供どもへドレ挨拶。ハテもうそれには及びませぬお加減のさめぬうち。イヤ〜。お春そでおぢやらぬ。親でも子でも極まつた辭宣作法と。庭に下りるも健やかに樹の前に畏り。御子供衆。何も御座らずとも斯うまゐつて下されい。親が折角おりての辭宜。辭宜返

したうても動かぬは知れてある。爰で  
く。ハ、ハ、ハ、噂たち餅を替やいのと  
フシ尻もちついて悦び笑ひ。梅が膳に押  
直り箸を取るより。ムウく。圓振鹽梅ち  
や味しく。三人の嫁女達。給仕も偏い  
させぬ様に。三杯は喰ふ合點で。眼おち  
やらしますちやなんよえ。ハ、ハ、ハ、詞  
こりや新しい三方土器誰が持つて來まし  
たぞ。イヤそれは八重さんの。ハテ氣が  
付いて忝い。春も何ぞくれるかい。梅ほ  
んに忘れてをりましたと扇三本袖土産。  
中の繪は梅松櫻お子達の數を祝うて。三  
本ながら末廣がり目出たう祝うて上げま  
する。圓コリヤめでたい忝い。中の繪も  
咄で知れた。明けて見るに及ばぬ此儘此  
儘。戴きますると。梅機嫌に千代が袂か  
ら。これは切の有合で私が縫うた手づつ  
頭巾。頭に合はずは縫直さう。お召しな  
されて下さんせ。圓ヲ、どれもく不足

もない心付なおくりやり物。サア盃も濟  
んだわ。おれが膳から上げてたも。子供  
等が膳は盛つた儘。冷えたであらう盛直  
してコレ喚達。梅二人前宛喰てたもや。圓  
イエく。私等はまそつと待つて。主達  
が見えてから打並んで祝ひましょ。そん  
ならそれよ。おれは村の氏神様へ參つて  
來ませう。そんならお參りなされませ。  
ヲ、く往きましょ。拵へて置いた十二  
銅そこにあろ取つてたも。三本のこの扇  
末廣うに。子供の生先氏神へ頼んだり  
見せたりせう。ヤア八重はまだ參るま  
い。次手ながら連立たう。サアく。ち  
へと機嫌よう。オク表を。へさしてフシ出  
でて行く。圓コレ千代さん。年寄らしや  
つても物覚えがよい事。こな様やこの春  
は氏神様知つてゐる。八重さんは今が始  
め。いはしやんすりや其通り。物覚えの  
よい親御に違ひ。物忘れする子供達。

松王殿何故遅いぞ。こちらの夫もなぜ見えぬ  
但しは來ぬ氣か。圓今日見えいでよい  
物かいな。それこそ其處へ松王殿。エ、  
これ女房を立つ所に立たして。刻限過ぎ  
たを知らずかい。ヤアベりく。と喧しい。  
時平様の御用あつてそれ仕舞はねば動か  
れぬ。先へ參つて其譯いへと云付けたを  
忘れたか。梅王も櫻丸もまだ來ぬさうな。  
親父殿も内にござらぬ。サアその親父様  
は八重様を同道で。梅もちつと先に氏神  
參り。兄弟衆はまだ見えぬ。圓ソレ見  
な。遅いといふおれは主持ち。梅王も櫻  
丸も主なしの扶持放され。用もない和郎  
達が遅いのが眞の遅いの。お春殿そちや  
ないかと。梅の端にもフシ残る意趣。  
梅王も日脚はたける急いで來かゝり突  
つかゝり。松王には顔ふり背け。圓お千  
代殿今日は大儀。コリヤ女ども。親人と  
櫻丸。八重も爰にはなぜ居やらぬ。イヤ

今も松王様のお尋ね。櫻丸様はまだ見えぬお二人は宮参り。ム、櫻丸はどうして来ぬなア。待兼ねる者は来いで。胸のわるい見とむない頬がまへと。梅王に當てこすられ。松王が一徹短慮。あたふの悪いねすり言ひ分あらば直にいやれ。何のわれに遠慮せう。わが頬がまへを見る度ケイ〜と虫唾が出る。ハ、ハ、ハ、ハレ申したり腹の皮。この松王は生れついて涙もろい。櫻丸や其方がやうに扶持放されの瘦弱。ひだるからうと思うてやるが兄弟のよしみだけ。ホ、扶持放されと笑ふ奴が。喰ふ扶持がろくな扶持か。鐵丸を食すといへども。心穢れたる人の物を請けずとは。八幡大菩薩の御託宜。心汚れた時平が扶持有難う思ふはな。人でなしの猫畜生。ヤア畜生とは舌長な梅王。今一言いうて見い。ホ、望みなら安い事。畜生々々どう畜生。

赦されぬと松王丸刀の柄に手をかくれば。梅王も反打返し詰り詰めよる二人の女房。これはマアおとましい氣が遠うたか松王殿と。千代が夫を抱きとむれば。七十の賀を祝ひに来て親父様に逢ひもせず。反打つてどうさしやる。祝ひ日に抜いてよいかこちの人梅王殿と。刀の柄にしがみつく。女房春を取つて突退け。七十の賀でも祝ひ日でも。堪忍袋のやぶれかぶれ留立して怪我するな。コリヤ松王おくれたな。女房が留めるを幸ひに頼げたに似ぬ腕なしめ。ヲ、留めらるゝを幸ひとは。わが心に引較べて松王には慮外の難言。身が女房が留めたより其方が女房が。親にもまだとの一言。肝先へきつと中り。掬へ〜〜たがもう堪らぬ。眞劍の勝負は親人に逢つての後。それ迄の腹臈に砂かぶらせば堪忍ならぬ。千代にこれを預けると兩腰抜いて投

り出し。フシ柄引裏けて身拵へ。ホ、畜生めがこりやよい了簡。櫻丸が来る迄は松王が命松王に預けると。同じく兩腰投げ捨て。双物を渡せば血はあやさぬ。女房共邪魔するなとつと寄つて縁より下へ踏落せば。早速の松王落ちさまに詣足かけば梅王丸眞逆様に落ちかさなり。掴みあひ擲きあひ。組んでは放れ。離れては又組合ひ。捨付け引伏せ蹴つ。踏んづ。双方力も同じし血氣盛りの根競。千代と春とは二人の兩腰。取られもせうかと氣づかひ半分傍へも寄せられず。ハア〜〜と心をあせり氣をもみ上げ。阿どちらが勝もせず擲き合うたが二人の存分。梅王殿もうよいわいな。松王殿もう置かしやんせ。梅やめて〜といふをも聞かず。勝負つかではむだ働き。投げてくれんと松王丸。嵩にかゝつて押す力。阿ひるまぬ梅王つつ

かくる。肩先ひねつてがつくりませ。横に抱へる松の木腕。地劣らぬ肘骨ノリ梅の木腕。絡みもちつて押合ふ力。地双方一度にこけかゝり。もたるゝ拍子に櫻の立木。土際四五寸残る木の上はほつきりぐわつさり。地折れたに驚く相嫁同士。二人が勝負も破れ角力ヲシ俱に。呆れて手を打拂ひ。うろつく中へ早下向。阿アレ親父様のお歸りぢや。白大夫様といふ聲に。地二人は肩入れ裾おろし。腰刀差す間もあらず戻られし。年は寄つても怖いは親。上へも上らず犬躰。地今日日の御祝儀お目出たいと。地祝儀は述べても赤面しヲシ座を捻らぬばかりなり。地親はほやく機嫌顔。地娘達が先へ来て七十の賀を祝うてくれたで。今日の祝ひはさらりと仕舞うた。知れてある刻限遅いは何ぞ障りがあつて来ぬに極めた。梅王松王ようこそく来てくれた。コレ

二嫁女。煮くちたであらうが雑煮祝はしたもつたかと。地折れた櫻は見ながらも誰が所爲ぞと咎もせず。呵る所を呵らぬ親ヲシ一物。ありと知られたり。地梅王丸懐中より用意の一通取出し。地祝儀すんで候へば私の所存の願ひ。これに書付け候ふと親の前に差出せば。地松王も亦一通身の上の願ひ是にありと。同じ所へ直せしはヲシいひ合せ。たる如くなり。地白大夫打笑ひ。同心やすいは親子兄弟夫婦。かう並んだ中願ひあらば口ではいいいで。ぎつとした此書付。さらばおらもぎつとして代官所の格で捌くと。地願書手に取上げつづく。讀むも口の中。願ひは何やら聞えねど。春と千代とは夫の心知つてゐる苦跡先を。知らねば案じるは八重一人。三人の兄弟諱ひ親父様お頼み申し。今日中直しと云合はした。千代さん春さんこりや何ぞい。何をいうても

こちの人。櫻丸殿ござらぬ故心當が皆違うた。道で眩暈が發つたかと思えぬ男を案じるやら。二人の願ひも氣にかゝり。スエチ小首傾け案じゐる。親父は二通讀み了ひ。地コリヤ梅王。そちが願ひに旅へ立つ陳くれとは。ムゝ推量するに外でもあるまい。菅丞相のござる島か。成程成程。結構な御殿に引かへ。地植生の小屋の御住居。御用聞く人なれば。梅王下つて御奉公仕らん。身のお暇と申しける。ム、恩を知らねば人面獸心というてな。顔は人でも心は畜生。島へ參つて御奉公がしたいとは。まんざら恩を辨へぬ畜生氣は離れた心。コリヤヤイ。御臺様や若君様お變りも遊ばされず。ござる所も知れた上旅立の願ひぢやな。イヤ御臺様は其以来お目にもかゝらず。御座所も存じませぬ。併し女儀の御事なれば。若君様とは又格別。地首秀才の御事は慥にとい

はんとせしが。松王を尻しり口くちにかけ。詞ことば詰つめに所は存ぞんぜねども息災いきさいに御座ござある噂うわさ。ヤイ馬鹿ばか者もの。大切たいせつな背せ秀才しゅうがい様さま。息災いきさいなを聞いたばかりお目めにもかゝらず在家わがやも知らず。それでおのれ忠義ちゅうぎが濟なむか。女儀おんながらの身みと吐つかしを御臺ごたい様さまは主まちやないか。コリヤヤい。尤も御不自由ごふじゆうな配所はいじょのお住居すまひ。お傍わがはたへ參まゐつて御用ごようを聞く。膝行ひざぎ役やくの奉公ほうこうはこの白大夫はくたふがよい役やくぢやわい血氣けつき盛り奉公ほうこう盛り。普承ふじやう相あひまの所縁しよえんとあれば。根掘り葉掘り絶たやさんとて鶴つるの目鷹やぶの目。油断あぶらだんならぬ讒者せんじやの所爲しよゐ。すはといふ時身を惜おぼまず。御用ごように立つ所存しよぜんはなうて。膝行ひざぎ役やくを願ねがふは命いのちが惜おぼしいか。敵たかが怖おそいか。旅立たびだちの願ねがひ叶かなはぬく取上とげぬと。地願ぢがん書がき顔がほへ打付うけてはつたと呪ののむ老らうの腹立はらだち。道理だうり至極しごくに梅王うめおう夫婦ふうふシ誤あやり入いつたる風情ふうじやうなり。詞ことばヤイ松王しょうおう。そちが此願このねがひを見れば。勘當かんだんを請こけたいとな。ハア。

ハ、神武天皇じんぶてんおう様さま以來いらい珍めづしい願ねがひぢやな。ハ、、、不孝ふじやうといはゞ誓ちかまないやつ。餘あまり珍めづしい願ねがひなれば地聞ぢき閉しめてくれるぞと親おやの了簡りやうかん。ハ、ハア忝かたじけないと悦よろこぶ松王しょうおう勇ゆうみ立ち。親おや子こ兄弟けいぎの縁えんを切る所存しよぜんも問とはず赦しやされしは。この松王しょうおうが主人しゆじんへ忠義ちゅうぎ。推量すいりやうあつての事ことなるべし。ハ、、、問といかさま口くちは調法てうはふな物ものぢやな。主人しゆじんへ横よこに取とつて行く道みちを。蟹かに忠義ちゅうぎといふわい。やい。甲かに似にせて穴あなを掘ほると。勘當かんだん請こければ兄弟けいぎの縁えんも離はなれ。時平ときへい殿どのへ敵對てきたいはば切きつても捨すてん所存しよぜんよな。尤も善惡ぜんあく差別さべつなく主まへ義ぎは立つにもせい。親おやの心こころに背そむくをな。天道てんたうに背そむくといふわい。望のぞみ叶かなへてとらする上うへは人外にんがひめ早はやや歸かへれ。地隙ぢげきどらば親子おやこの別わかれ竹たけ箒はらくらはさうと筋骨こつこつ立てて怒いかる聲こゑ。松王しょうおうは思おもひの儘まま女房にようばう來きいと引立ひきだて行く。千代ちよはさすがに親兄弟おやけいぎ名な

殘ごも惜おぼしき相嫁あひよめの。顔かほを見る目めもあかれぬ涙なみだ。フシ杖つゑ絞しぼつて出でて行く。ハレヤレ婿むこ嫁よめしや面倒めんどうな奴やつ片かた付つけた。そこな馬鹿ばか者もの。御臺ごたい君きみの御行方ごぎやう尋たずねにいかぬか。どうせぬかと。これも手強てづようきめ付けられ。問とそんなら島しまへは。サア行く所ところへはおれが行くわい。地出ぢでて行いけくをこはがるお春おはる。八軍はつぐん様さま後ごでよいやうに。お託たく言ごと云い捨てて。夫婦ふうふは門かどへ白大夫はくたふはシ唾つばを。呑の込んで奥おくへ行く。地兄弟ぢけいぎ夫婦ふうふに引別ひきわかれ取殘とれごされし八重やえが身みの。仕廻しまわもつかぬ。シ物思ものおもひ門かどへ立つそに待つ夫おとこ。思おもひがけなき納戸のうど口くち刀片たうぺん手に莞爾わんじやくと笑わらひ。男おとこ女房にようばう共とも待まちちつらんと。地聲ぢこゑにびつくり走りより。ヤアいつの間にやら來きたともしはす。案あんじる女房にようばうを思おもはぬ仕方しかた。兄弟けいぎ衆しゆの事ことについて親父おやぢ様さまのお腹立はらだち。其場そのばへは出でもせいで。問とマアなんで此方こゝ様さまは納戸のうどの内に。エ、これナア。地譯ぢやくを聞きかし



て、と。フシ聞きたがるこそ道理なれ。  
地暫くあつて白大夫。食出鏝の小脇差。

三方に乗せしを、と。出づるも、フシ老  
の足弱車。地舍人櫻が前に置き。用意よ  
くばとく、といふに女房が又悔り。同

コリヤ何ぢや親父様。櫻丸殿どうぞいな  
ア。何で死ぬのぢや。地腹切るのぢや上ず

ハリ切らねばならぬ譯ならば。未練な根性  
さぎやませぬ。こなさんが云はれずば  
親父様の只一言。案じる胸を休めてたべ。

お慈悲く、と。ハムフシ手を合せ泣くより。  
外の事ぞなき。同ヤア親人に何御苦勞。

地是迄馴染む夫婦の中所存残さず言聞か  
さん。同某が主人と申すもお畏れ多き齋

世の君様。百姓の悴なれども。菅丞相の  
御不便を加へられ。親人へは御扶持方。

御愛樹の松梅櫻。兄弟が名に象り。松王  
梅王櫻丸。地地地ありや。フシ冥加なや。地鳥

帽子子になし下され御恩は上なき樂地の

勤め。三人の其中に櫻丸が身の幸ひ。人間  
の胤ならぬ竹の園生の御所奉公。下々の

下々たる牛飼舎人。勿躰なくも身近く召  
され。菅丞相の姫君とわりなき中の御文  
使。仕了せたが仇となつて讒者の舌に御

身の浮名。終には謀叛と云立てられ。菅原  
の御家没落。是非もなき次第なれば。宮

姫君の安堵を見届け。義心を顯はすわが  
生害。同今朝早々爰迄来て右の段々。生  
きてゐられぬ最期の願ひ。聞届けて切腹

刀。親の手づから下されたわい女共。  
我に代つてお禮も申し死後の孝行頼むぞ

と義を立て守る夫の詞。女房わつと聲を  
上げ。仇なる懸路のお媒介親王様の御悪

名。丞相様の流され給ふその言譯に切る  
腹なら。この八重も生きてはゐられぬ。

私は残つて孝行せいと胴窓にもよういは  
れた。それよりはまだむごい腹切る禮を

申せとは。それが何の禮どころ無理な事

いふ手間で。一緒に死ねとコレ申し女房  
の願ひ立てたべ。親父様の思案はない

か俯向いてばかりござらすとも。よい智  
恵出して下さりませ。夫の命生死は親父

様のお詞次第。お前は悲しうござりませ  
ぬか。親の手づからこの三方。腹切刀は

何事ぞと。恨みつ頼みつ身を、フシ投伏し  
悶え。こがるゝ有様は。ハムフシ物狂はし

き風情なり。地白大夫顔ふり上げ。子に  
死ねといふ腹切刀。むごい親と思ふ言譯

ではなけれどな。同この曉はわが身の祝  
ひ。いつもより早く起き門の戸明ければ

櫻丸。ヤレ早う来てくれた。陸ならば夜  
通し。但しは船か。まア此方へと呼入れ

て様子を聞けば右の次第。白大夫づれが  
悴には驚き入つた健氣者。とどめても聞

入れず。今、の祝儀しまひ迄。女房が來  
ても逢はしはせぬ。おれが出いといふ迄  
は納戸の内に隠れて居いと。地一寸延し

に命をかばひ。助けてよいか悪いかはお  
ら了簡に及ばず。神明の加護に任さん  
と。岡坡前祝儀にくれた扇三本。幸ひ繪  
には梅松櫻。子供の行末祈る顔で氏神の  
祠へ直し置き。信を取つて御園の立願  
櫻丸が命乞ひ。中の繪は上から見えぬ三  
本の此扇。初手に櫻をとらしてたべ上ら  
せ給へと再拜祈念取上げた扇開けば梅の  
花。南無三これは叶はぬ吉か。神の心を  
疑ふ御園の取直しせぬものなれども。助  
けたいが一ばいで取直す次の扇。今度も  
違うて又松の繪。頼みも力も落ち果て  
て下向すりや折れた櫻。定業と諦めて腹  
切刀渡す親。御思ひ切つておりや泣かぬ。  
そなたも泣きやんな。ヤ。ヤ。、、ア  
レ聞いたか女房共。櫻丸が命惜まれて老  
人の心遣ひ。御恩も送らず先立つ不孝。  
御赦されて。フン下されい。下下郎ながら  
恥を知り義の爲に相果つると。三方取つ

て戴くにぞ。もうコレ今が別れかとスエテ  
泣くに泣かれぬ夫の覺悟。白大夫目を  
しばたき。詞潔い悴が切腹。介錯は  
親がする。その刀コレ見やれと懐から  
取出すは。願ひ込んだる鉦撞木。コレ  
この刀で介錯すれば。未來永劫迷はぬ功  
力。利劍即是彌陀號と。撞木を取つて  
打鳴らす。ハルシ鉦もしどろに。南無あ  
みだく。南無あみだ。く。南無  
あみだく。念佛の聲と諸共に襟  
押寛げ九寸五分。左手の脇へ突立つれば。  
八重が泣く聲打つ鉦も。拍子亂れて。南  
無あみだく。右の肋  
へフン引廻し。調憚りながら御介錯。ヲ  
介錯と後へ廻り撞木振上げ。南無  
阿彌陀佛と。打つや此世の別れの念佛。  
九寸五分取直し吼のくさを刎切つて。  
フンかつばと伏して息絶えたり。八重  
が覺悟もこの場を去らず夫の血刀取上ぐ

る。枳殼の陰より梅王夫婦走り寄つて。  
こりや何事と九寸五分掬取り捨て親の前  
に畏り。岡先程歸れとありし時表へは出  
たれど。櫻丸が來ぬ不思議と。丞相様の  
御秘藏ありし。櫻の折れたを詮議もなさ  
れぬ。彼是不審に存ずるから裏より忍び  
立戻り。始終の様子は承はつた。是非  
に及ばぬあの樹と共に枯れし命の櫻丸。  
兄弟の最期餘所に見て。親人の鉦鼓に合  
せ。女夫の者が忍びの念佛。あつたら若  
者殺せしと。悔む夫婦も聞く親も。八重  
も死なれぬ身の練習。スエテ是非も涙に。  
南無阿彌陀佛と。ハルシ鉦打納め。撞木  
とかはる杖と笠。白大夫は片時も早く。  
首丞相の御跡墓島へ赴く現世の旅立。  
櫻丸が魂魄は未來へ旅立。この亡骸梅王  
夫婦頼むぞと。八重が事迄つどく頼  
む詞の置土産。冥途のみやげは只念佛。  
南無阿彌陀佛。く。南無あみだ

佛くく。地無あみだ笠打かぶり。西へ。行く足。十萬億土。亡骸送る親送る。生きての忠義死したる義臣。一樹は枯れし無常の櫻。残る二樹は松王梅王。三つ子の親が住所。末世にそれと白大夫。佐太の社の舊跡も神の。恵と知られる

#### 第四

三下り眼君を思へばよやヨホイホ結ばれ糸のハリナ。とけぬ心がつろござるいよ辛ござる。つらき筑紫にナホスシ立つ年月。ハルツシ御いたはしや。菅丞相。地讒者の業に罪せられ。塙生の小家の起臥も。本ほん昨日と暮れて今日は早や。地延喜三年如月半。空も春めく野山の眺めオツリ野飼に。召させ奉る。わが樂みは在燈唄。眼君を思へばよやヨホイホ。圓ハ、ハア何をがなのお氣晴し。しはらくさいどつてう聲。牛殿の手前も面目ない。エ、見

れば見る程見事な毛並。角の樽へ眼の備へ。頭持の様子骨組肉合。毛惣毛一角眞黒々牛。渡り糰子も及ばぬ色艶。天角地眼一黒直頭耳小齒遠。天晴御牛候よちよくらのおちよせいと。フシ譽めにける。

菅丞相はめづらかに。スエテ聞馴れ給はぬ譽詞。圓ヤイ白大夫。地春は耕へし。秋は刈穂の稻を負ほせ。耕作の助けとなる牛の善惡よく知る筈。圓天角地眼と申せしは。角と眼の備への事。一石六斗二升とは。地牛を買取るその價升目を積るものやらん。フシ語れ聞かんと仰せける。圓さつてもしたり。天下にありとあらゆる事ども。餘さず漏さず知つてござる丞相様。牛の事は御存じなく。お尋ねに預かるは。百姓に生れた一徳。お慮外ながら。牛の謔稱聴かしやりませ。一黒と申すは。俵物の石目ではござりませぬ。毛色を吟味する時は。黒いが極上それで

一黒。次に直頭とは天窓の見所。頭とは頭。どつちへも傾かず。まろろくながよいさかいで直頭と申します。耳小の耳は耳。小はちひさし。随分耳はちひさいを好みます。扱齒遠とは。きやつがおねおねにれを噛む。上下の齒先揃ふは惡し。五一に生えたが齒遠の齒の見所。地次第を上から云立つれば。いちこくろくとうにせうはちがふ。牛の講釋もう。フシ仕舞でござます。圓誠に性は道に依つて賢し。白大夫が咄を聞き。地一つの徳を得たるわと。仰せにひよこく小躍りして。圓こりやマアあんなる仰せぞい。親の代から御領分の百姓。三つ子の事迄お世話になされ。御恩に御恩有難うて。寢た間も忘れぬこの親と遠うて。三人の悴ども。一人は死ぬる。跡二人は氣も揃はず。面倒な奴等打放つて。此太宰府へ参つたは去年の三月。うそ淋しい不自由な

お住居。一年の日数は経てど。月見花見に出もなされず。今日は何と思召し。牛引けとある御意が出て。私が轍も腰も。

ア、延びやかな春の野面。安樂寺へお参詣は。御歸洛の御立願でござりませう。

否とよ我に科なければ。佛に苦勞かけ奉り。身の上祈る心はなし。地蔵者の業としろし召さば罪なき事も世に顯はれ。歸洛の勅説下るべし。それ迄は菅丞相。長月にも花にも目はふれず。私なき臣が心帝はしろし召されずとも。天の照覽明らかなり。安樂寺へ志すは此際ふしぎの靈夢。同管丞相が愛樹の梅。今如月の花盛り。都の住居思ひ寐の枕の硯引寄せて。筆に任せて斯くばかり。東風吹かば。匂ひおこせよ梅の花。主なしとて。春な忘れそと。心を逃べて。睡みに。妙なる天童わが枕に立たせ給ひ。調汝憐愍の心深く。仁義を守る忠臣の功。心なき草

木まで情を受けし主を慕ひ。地花ものいはねど其驗安樂寺へ詣で見よと。示現に依つて宜ふ所へ。安樂寺の住僧杖を頼りに老の足。それぞと見奉りしより。小腰を屈め立寄れば。丞相較より。ハレシ下りさせ給ひ。同住侶の歩行は何處へぞ。我は貴院へ行く折から。これにて對面視着々々。ハア愚僧儀も外ならず。公の御目にかゝりたく參る仔細餘の義にあらす。夜前ふしぎの靈夢の告。御慈愛の梅一樹。配所の主に見せよとある。地示現にかはらぬ觀音堂の左の方。一夜に生出づる不思議さよと。語るも聞くも正夢の劃符を合せし如くなり。これより寺へは程近しと。オッリ住侶へ伴ひ御歩路。地安樂寺に入り給へば。それぞとしるき梅花の薰袖に。フシ留木の心地せり。地暫くこれにて御詠と。床几直させ梅を設け。御菓子小竹筒と住持の饗應。白大夫はこつ

てこて梅の土際覗き廻り。同こりや不思議。イヤ希代ぢや。申し丞相様。道すがらお住持の夢咄。へ、何をやるるゝやら。そんな事がようあらうと。誠しない事疑うてをりましたが。来て見て悔り。此木の枝ぶり花の匂ひ。佐太のお下屋敷に預かつてをりました。それぢや。其梅でござりまする。ア、神佛の告は争はれぬ。おらが爰へ來た跡では。水一杯飲まし人もあるまいに。ぶきくとした木の色艶。芽立の氣條がつういつい。花はうざる程付いたれば。梅漬の時分二三斗は慥に生らう。地四五升は地を借つた年貢代。お寺へも進ぜます。跡は此方の實入り。同今は先づ腹の實入り。御馳走酒下さりましたよ。ア、これお酌。白大夫が盃は。いつつでも此天目。立寄は氣にかゝると。地床几の傍にちよつ踞ひ。口も心も有の儘。フシ見えた通りの律義

鑑習手授傳原菅

者。地花の眺めに一入の興を催しおはする所に。そりや喧嘩よりアヤ抜いた。切合うてそりや来るわ。寺内へ入れな門打てといふ間あらせず踏込みく。打合ひ戦ふ侍二人。寺僧は驚き白大夫。御座を圍うてア、これく。詞見れば双方旅装束。喧嘩はふり物とあつてから。爰で仕舞は付けさせぬ。出やれくといふも聴かず。切合ふ一人はわが子の梅王。コリヤまあ其方は何として。ハアくひあいな切られなと。氣をもみ焦る親心。詞聲の助太刀相手の刀。梅王に打落され逃ぐるを賺さず飛びかゝり。片手掴みに筋斗打たせ。地膝にかためしッ健氣の振舞。詞ヤレく出かした手柄々々。ヤ手柄はしたが喧嘩の次第。次には其方が下つた様子。都の事を案じてごさます。幸ひこれに丞相様様子一々申上げい。ハッハア恐れながら梅王が念願達し。變ら

せ給はぬ御尊體。見奉るは生涯の本望。都に御座あるお二人様。世を忍ぶお身なれば一所には置きまされず。若君様は武部源藏に預け置き。私が妻。櫻丸が女房。八重と春とは御臺様の御介抱。お身の上は差置かれ。配所の様子見て参れと。仰せに幸ひ出船の手番。地天運に叶ひ日和まん。千里一眺ね日敷も込めず。夜前この地へ筑紫船。乗合ひの中に時平が家來驚塚平馬。詞この梅王を見知らぬ馬鹿者。ふづくりかけて様子を問へば。菅丞相を殺しに來たと。おのが口から最期を急ぐ。地寺にござるをよう知つて直に仕かける不敵者。梅王が御土産と早繩かけてぐつと締め上げ。縁柱に猿繫ぎハズミンシン地よくこそ見えにける。地丞相御悦喜淺からず。戀しき都の様子を知らず。忠義の花は有情の梅王。示現によつて飛來る花は非情の此梅の木。有情非情も隔てな

く菅丞相を慕ひ來る。梅に褒美の御言の葉。梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に。何とて松の情なかるらん。く松王は時平が舍人。枯れし櫻は宮の舍人。梅王はわが舍人。花の榮えは安樂寺その名も高き飛梅のッ不思議は今に隠れなし。詞ヤイ梅王。有難い今の御歌。この梅に准へ其方をお譽め遊ばし。櫻は枯るゝ世の中とは。死んだ悴を御悔み。つれなかるらんとなる松王めは。時平に追従してをろな。ホ、親人の推量違はず。兄弟といふも穢はしい。畜生めは差置いて。さす敵は此驚塚。地サア時平がたくみ白狀せい。いやといへば刀の引導。どうぢやくつと立ちかゝる。詞アこれ聊爾あるな。主従の義を立てぬき。命にかへていはぬ古風。いはして置いて殺すも古風。新らしい助かる様に残らず申す。時平殿は王位の望み。邪魔になる菅丞相首取つて立歸

れ。軍陣の血祭し大望の旗を上げ。天皇親王院の御所片端より天下を一呑。身共もく家になる樂み。空悦びの裏か來て。耻を晒す縛り繩。早う解いて下さりませと。時平が叛逆一々残らず。閉し召されし普丞相。柔和の形相忽ち變り。御背に血をそぎ。眉毛逆立ち御憤り。都の方を睨みつけ物狂はしく、フシ立ち給へり。白大夫恠りし。周知れてある時平がたくみ。今聞いたか何ぞの様に。ついで覺えぬ怖いお顔。爰から睨ましやましても。都へは届きませぬ。御持病の瘡が發れば。地ゼン悲しうござりますとスエテ老のぐどく物案じ。詞やをれ梅王白大夫。時平の大臣が謀叛の企て。閉捨てられぬ御大事。赦免なければ歸洛も叶はず。王位を望む朝敵と。しろし召されぬ玉體危し。大臣が忠義徒らに。此所に朽果つる。骸は虚命蒙るとも死したる後

は懼りなし。靈魂帝都に立歸り帝を守護し奉らん。天に誓のわが願ひ驗は目の前白梅の。氣條ぼつきと折取り給ひ。朝朝敵一味の佞人輩。退治の手始めこれ見よと。地枝にてちやうど打ち給へば。平馬が首は飛梅の氣條も花の亂れ燒。眞の氣も及びなき梅の名作御手の中。フシ親子は恐るゝばかりなり。詞やア汝等。かかる大事を聞くからは片時も早く都に上り時平がたくみ奏聞せよ。色我は見上ぐるこの高山絶頂に三日三夜。立行荒行根氣を碎き。梵天帝釋閻羅王三天王に誓を立て。魂魄雲井に鳴雷十六萬八千の。首領となつて眷屬引連れ都に上り。謀叛の奴輩引裂き捨



てん。現世の對面これ迄なり念ふれやつと。御聲も。コリ共に烈しきはやち風。吹立てく本堂の蕪破れて庫裡方丈。薛遺戸は木の葉の如く。庭の立木も飛梅も。ナメスフ花も吹きしきる。親も住寺も大きに驚き。詞期も來らざる御身を捨て。天帝へ祈誓ある。御本意は違するとも。御豪姫君若君の御歎きはいかばかり。とどまり給へと御袖に。取付

く梅王白大夫。弓手馬手へ撥飛ばし。阿ど目は後に。フ心残し  
 ノリ住僧いたくな留め給ひそ。早や天帝のて立歸る。雄エ、どん  
 恵みによつて。形は此儘鳴神の。雄ふしな奴がうせをつて御機  
 きを見せんと散り残る。梅花を取つて口嫌は如何ぞと。障子の  
 に含み天に向つて白梅花。渦く花びら火此方に手をつかへ。思  
 焔となつて。雲井遙に行末は怪し。恐ろひがけない螺の貝お目  
 し三度夢破る。雄門山伏が螺の貝吹立ても覺めう。お疔はのぼ  
 ぐ北嵯峨の。サハリ在も山家も抜目なく。らぬか。八重さんいか  
 役の行者の跡を追ひ。朝夕してやる五器がと尋ねれば。阿サレ  
 膳器。五器の實ッ修行と知られたり。バイナ。いつにない御  
 阿ア、やかまし御奉禮殿貝吹いて下さん臺様すやくと寐入ば  
 な。頼うだ方のお氣結ばれ夜はろくに御な。貝に驚きなされた  
 寝ならず。今とろくとお睡み。アレまか結身に冷汗。思へば  
 だいの断りうても閉入れぬ。無法禮殿憎い山伏づら。サア私  
 止めやらぬかそしてから無遠慮な。笠もも腹が立つて。入れる  
 脱がずに内へ這入り。うそくと何見や手の中もやらなんだ  
 る。女子ばかりと思やつたら當の榎が遠と。雄二人が咄に御  
 ひましょ。サア出やらぬか往にやらぬか臺所。イヤなう山伏の  
 と。雄阿りこかされ御奉禮門へは出れ業ではない恐ろしい夢



を見て。勳氣が今に納まらぬ。その夢の物語。春も八重も聞いたも。御所は幸府安樂寺。連合の御秘藏が筑紫へ飛梅。

梅王丸も一時に下り合せた御悦び。梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に。梅何とて松のつれなかるらんと即座の御詠歌。一字も忘れず覚えしは。物の知らせのフシ正夢か。猶まだ其上に時平の家來。御丞相様を殺すたくみ。事顯はれて都の様子。王位を奪ふ敵の企て白狀するをお聞きなされ。以ての外なお腹立ち。猶赦免なれば歸洛も叶はず。危いは天皇のお身の

上。帝釋天へ祈誓をかけ鳴雷の神となつて。時平に興せし同類ども。蹴殺し捨てんとお憤り。その凄まじさ恐ろしさ。夢とはさらに思はれずと語り給へば二人の女房。御お案じなされるは御尤もさりながら。逆夢と申しますれば却てめでたき御吉左右。なう春さんさうでないか。成程

さうぢや。追付け御歸洛なされませう。したが今來た山伏づら。編笠で顔も見せず物もいはず。うそく覗いて去にをつたが如何にしても氣にかゝる。夫梅王殿の指圖にてこの嵯峨に人知れず。御臺様のござりまするを嗅出しに來た敵の犬。

猶白大夫様梅王殿も。筑紫へ下つて我々ばかり。もう爰にも置かれませぬ。幸ひ此頃承はれば。御法性坊の阿闍梨様。下嵯峨へ來てぢやげな。丞相様とは師弟の約束。右の様子を申上げ御臺様の御事を。お頼み申して今日中に。早う所が替へま

したい。わしや一走り往て來やんじよ。八重さん萬に心を付け。油断して下さんすな。ヲ、春さんのよう氣が付いた太儀ながら往て下さんせ。跡は氣遣ひさしやんすなと男勝りのかひなくしさ。御臺もことなう御悦び。御コレ春。恒正様に逢やつたら。夢の事もお話し申し。善

惡の譚聞いてたも。アイく。何も彼も心得てをりまする。鬼角は緩りとしてゐられぬと。抱するやら笠取るやら。追付け吉左右お知らせと。フシこつくしこそ急ぎ行く。猶程もあらせず時平が

家來星坂源吾。あれこそ丞相の御臺よと手の者連れて駈け入るを。手早く八重は長押の長刀。御臺を奥へと目で知らせ。何者なれば踏込んで狼藉。目に物見せんと振廻す。ヤア小さかしい女め。時平

公の仰せを請け御臺を迎へに來つたり。猶邪魔ひらがば討取れと。下知に隨ひ茅花の穂先切立てく。三裏追ひまくれど。多勢に無勢數ヶ所の疵。長刀杖に立歸り。御ナウ御臺様もう叶はぬ。はやう退いて下さりませ。春様はまだ歸らすか。エ、口惜しい。無念々と云ひ死に。はかなき八重が最期の有様。御臺は前後も辨へず死骸に取付き御歎き。



ら私が呼びに参りましょ。いえ／＼幸ひ私も参つて来る所があれば。そのうちにはお歸りでござりませう。コレ三助。其持つて来た物あなたの傍へ上げませ。アツと地答へて塙重。櫃に乗せたる一包。ソソ内儀の傍へ差出す。同これはまあ／＼

いはれぬ事を。イヤおはもじながらこの子が参つた印。此塙重は子達への土産。

地取弘めて下さりませといはねど知れし蒸物煮染。わが子に世話を焼豆腐。粒椎茸の入つたるはソソ奔走子とこそ見えに

けれ。同是はマア何から何まで取揃へて御念の入つた事。地戻られたら見せませう。同イヤモほんの心ばかり宜しうお頼み申上げます。コレ小太郎。ちよつと隣村まで往て来る程に。おとなしうして待つて居や。悪あがきせまいぞ。御内證様往て参じましょ。地表へ出づれば母様わしも行きたいと。緇り付くを振放し。

地嗜めよ。大きな形して跡追ふのか。御覽じませまだ頭是がござりませぬ。ソリヤ道理いなドリヤ小母がよい物やりましょ。地ついで戻つてやらんと。目で知らすればアイ／＼ついちよつと一走り。跡追ふ子にも引かざるゝ振返り見返りて

オクリ下部へ引連れ急ぎ行く。地どりやちの子と近付にと若君の傍へ寄せ。機嫌紛らす折からに。立歸る主の源藏常に變りて色蒼ざめ。内入り悪く子供を見廻し。

同エ、氏より育ちといふに。繁華の地と違ひ。いづれを見ても山家育ち。世話がひもなき役に立たずと。地ソソ思ひありげに見えければ。地心ならず女房立寄り。

同いつにない顔色も悪し。振舞の酒機嫌かは知らぬが。山家育ちは知れてある子供。憎弊口は聞えも悪い。殊に今日は約束の子が寺入して居ます。地性悪い人と思ふも氣の毒。機嫌直して逢うてや

つて下されと。小太郎連れて引合せど差俯向いて思案の躰。いたいけに手をつかへ。同お師匠様今から頼み上げますと。地いふに思はず振仰向き急度見るより暫くは。打守り居たりしが。忽ち面色和ら

ぎ。同扱々器量勝れて氣高い生れつき。公家高家の御子息と云うてもおそらく恥かしからず。ハテ扱そなたはよい子ぢやなうと。地機嫌直れば女房も。同何とよい

子よい弟子で。ござんしよが。好いとも／＼上々吉。シテその連れて来たお袋は何處に。サお前の留守なら其間に隣村まで往て来というて。ヲ、それもよし／＼

大極上先づ子供と奥へやり機嫌よう遊ばし召され。それ皆お暇が出た。小太郎共に奥へ／＼と。地若君諸共誘はせ。ソソ跡先見廻し夫に向ひ。同最前の顔色は常ならぬ氣相。合點の行かぬと思うた所に。今又あの子を見て打つてかへての機嫌

星坂透さず走りより引立て行かんとせし所に。以前の山伏のつさ〜と顯はれ出で。いで其御臺を齋料と。飛掛つて源吾が首筋。掴んで目より高く差上げ。冥途の旅へうせをれと泥田の中へ頭轉倒。直に御臺を引抱へ。石原砂道嫌ひなく飛ぶが如くに。三異進み行く。地一字千金

二千金 ヲ三千世界の。寶ぞと。教へる人に習ふ子の中に交はる菅秀才。武部源藏夫婦の者いたはり傳きわが子ぞと。人目に見せて片山家。メテ芹生の里へ所替。子供衆めて讀書の器用不器用清書を。頗

に書く子と手に書くと人形書く子は天窓搔く。教ゆる人は取分けて、フシ世話をかくとぞ見えにける。地中に年かさ五作が息子コレ見なこれ見や。師お師匠様の留主の間に手習ひするは大きな損。おり

や坊主天窓の清書したと。見せるは十五の涎くり若君はおとなしく。一日に

一字學べば三百六十字との教。そんなこと書かずとも本の清書したがよいと。八つになる子に呵られて。ませよ〜と指さして、フシ誂戲かゝるを殘りの子供。兄弟子に口過す耐くめをいがめてやると。地手ん手に壓尺振廻はす自然天然肩持つも、フシ傳ふる筆の威徳かや。主の女房奥より立出で。又こりや例の闘

舞かおとましや〜。今日に限つて連合の源藏殿。振舞に往てなれば戻りも知れぬ。ほんに〜こなた衆で一時の間も待兼ねる。今日は取分け寺入もある筈。晝から休ます程に。皆精出して習た〜。ソリヤ又繕しや休みぢやと。ヘズメフシ筆より先に讀む聲高く。四いろはに。此中は御人被下。一筆啓上。地づくのヘルフシ男が肩に堪重。文庫机を擔はせて小ナナリ利發らしき女房の七つばかりな子を連れ

て。頼みませうと云ひ入る。内にもそれと早や悟り。此方へお入り遊ばせと。いふもしとやかアイ〜と愛に愛持つ女同士、フシ来た女房は猶笑顔。私事は此、村端に。輕う暮してをる者でござります。此わんばく者をお世話なされて下さりよかと。お尋ね申しにおこしましたれば。おこせ世話してやると結構なお詞にあまへ。早速連れて参じました。内方にも。御子息様がござりますすが。どのお子でござりますぞ。アイこれが源藏殿の跡取でござります。コレハ〜よいお子様や。外にも大勢の子達いかいお世話でござりますよ。アイ御推量なされて下さりませ。シテ寺入は此お子でござりますか。名は何と申します。アイ小太郎と申しまして。わんばく者でござります。イ、ヤイヤ。氣高いよいお子や。折悪う今日は連合源藏も。振舞に参られました。これはマアお留守かいな。お待遠な

顔。猶なほ以もつて合あ駢へん行ぎやうかすどうやら様子がありさうな氣遣ひな。聞きかしてと問とへば源藏。圓まホ、ウ氣遣ひな答。今日けふ村の饗應きやうおんと偽いつはりり某を庄屋の方へ呼付け。時平が家來よき春藤はるとう玄蕃げんぱん。今一人は菅丞相の御恩を被おぼながら。時平に隨したがふ松王丸。此こゝ奴病やつまひみ巻まけながら檢分の役と見え數百人にて追取おと巻き。汝が方に菅丞相の一子菅秀才。わが子として匿かくれ由訴人よすえんあつて明白。急ぎ首討つて出すや否や。但し踏ふ込み請取まがらうや。返答如何にと返引かへひきならぬ手話。是非に及ばず首討つて渡さうと請合まがうた心は。數多ある寺子の内。いづれなりとも身代りと思つて歸る道すがら。あれかこれかと指折つても。玉簾たままの中なかの誕生と。菰垂こもたれの中なかで育つたとは似ても似付かず。所詮御運ごんの未なるかいたはしや淺ましやと。地屠所ぢじよの歩みで歸りしが天道てんたうのひかへ強きにや。圓まの寺入の子を見れば。ま

んざら烏を驚おどともいはれぬ器量。地一旦身代りて欺あざまされ此場さへ廻まわれたらば。直すに河内へお供する思案。今暫くが大事の場所と語れば女房待たんせや。圓ま其松王といふ奴は三つ子の内の惡者。若君の顔はよう見知つてゐるぞえ。サアそこが一かばちか。生顔なまがはと死顔しなまがはは相好あひがの變るもの。おもさし似たる小太郎が首よもや質しとは思ふまじ。よし又それと顔はれたらば松王めを眞まこと二つ。残る奴輩切つて捨て。叶はぬ時は若君諸共。死出ししゅ三途さんずの御供と胸を据すゑたが一つの雛儀。今にも小太郎が母親迎むかひに來たらば何とせん。地此儀に當惑差當つたはこの雛儀。圓まイヤ其事は氣遣ひあるな。女子むすめ同士の口先くちさきでちよつほくさ欺あざして見よ。イヤその手では行くまい大事は小事より顯あはるゝ。事によつたら母諸共。エ、イ。こりややい。若君には替かへられぬお主の爲を辨わへよと。地

いふに胸むねすゑ左様でござんす。氣弱きじやくうては仕損しとんぜん。鬼おにになつてと夫婦は突立つきたち。互たがに顔を見合せて。圓ま弟子でし子こといへば我が子も同然。サ今日に限かぎつて寺入てらいしたはあの子が業わざか母御の因果いんぐわか。報ういは此方が火かの車くるま。追付おっつけ廻まわつて來ませうと。地妻が欺あざまれば夫も目をすり。せまじきものは宮仕へとヌメ共とぬめどもに。涙なみだにくれ居ゐたる。地かゝる所へ春藤玄蕃首見はるとうげんぱんる役は松王丸。病苦びやくこを助くる視み乗物しやうりやく。フシ門口ふしもんぐちに昇のぼり据すゆれば。地跡あとには大勢おほしやう村の者もの附隨つたがうて申上げます。圓ま皆これにをる者の子供が手習てならひに參まつてをります。若し取違とれちがへ首討くちたれては取返とれかへしが成りませぬ。何卒なんぞお戻し下されと。地願ねがへば玄蕃げんぱんヤアかましい蠅虫はるば奴等ら。圓まうぬらが悴がの事ことまで身みどもが知つたことか。勝手次第かたてしだいに連れ失せうと。地叱しりつくれば松王丸しょうわうまるヤレお待ちなされ暫しばらくくと。視みより出るも刀を杖つゑ。圓ま憚おどりなが

ら。彼等とても油断はならぬ。病中ながら拙者めが檢分の役勤むるも。外に菅秀才の顔見知りし者なき故。今日の役目仕事すれば。病身の頑ひ御暇下さるべしと。有難き御意の趣疎かには致されず。菅丞相の所縁の者この村に置くからは。百姓どももぐるになつて。銘々が悴に仕立て助けて歸る術も有る事。コリヤやい百姓めら。ざわ／＼と吐かさずとも一人づつ呼出せ。面改めて戻してくりよと。退引させぬ釘錠。打てば響けの内には夫婦。豫て覺悟も今更にフシ胸轟かすばかりなり。表はそれとも白髮の親父門口より聲高に。長松よ／＼と呼出だせば。ヨツト答へて出て来るは腕白顔に墨べつたり。似ても似付かぬ雪と墨これではないと赦してやる。岡岩松は居ぬかと呼ぶ聲に。祖父様何ちやと敏捷で。出で来る子供の頑足なき。顔は丸顔ツシ木み

しり茄子。詮議に及ばぬ連れうせうと腕付けられテ怖や。調嫁にくはさぬ此孫を命の花落ち通れしと。祖父が抱へて走り行く。次は十五の澁くり坊よ／＼と親父が手招き。父よおれはもう爰から抱かれて往のと。爰あまへる顔は馬顔で。聲恭テ泣くな。抱いてやらうと于銚を。猫なで親がくはへ行く。私が悴は器量よしお見連へ下さるなど。馬断り云うて呼出すは。色白々と瓜實顔こいつ胡亂と引捕へ。見れば首筋眞黒々墨か痣かは知らぬども。こいつでないと突放す。その外山家奥在所の子供残らず呼出して。見せても／＼似ぬこそ道理士が産した計字。ツシ子ばかりよつて立歸る。斯ハ身の上と源藏も妻の戸浪も胸を据ゑ。待つ間程なく入来る兩人。阿ヤア源藏。此玄番が目の前で討つて渡そと請合うた。菅秀才が首サア請取らう。地早

く渡せと手詰の催促ちつとも隠せず。假初ならぬ右大臣の若君。掻き首捻ち首にも致されず。暫くは御容赦と立上るを松玉丸。阿ヤア其術はくはぬ。暫しの容赦と陳どらせ逃支度しても。裏道へは數百人を付置き。蟻の這出る所もない。生顔と死顔は相好が變るなどと。身替りの眞首それもたべぬ。古手な事して後梅すなと云はれてぐつとせき上げ。阿ヤアいらざる馬鹿念。病みほうけた汝が目玉がでんぐり返り。逆様眼で見やうは知らず。粉れもなき菅秀才の首追付見せう。ヲ其舌の根の乾かぬ内に早く討て。地とく切れと玄番が權柄。ハツトばかりに源藏は胸をフシ据ゑてぞ入りにける。傍に聞きゐる女房は爰ぞ大事と心も空。檢使は四方八方に眼を配る中にも松玉。机文庫の數を見廻し。阿ヤア合點の行かぬ。先だつて往んだ餓鬼等は以上八人。

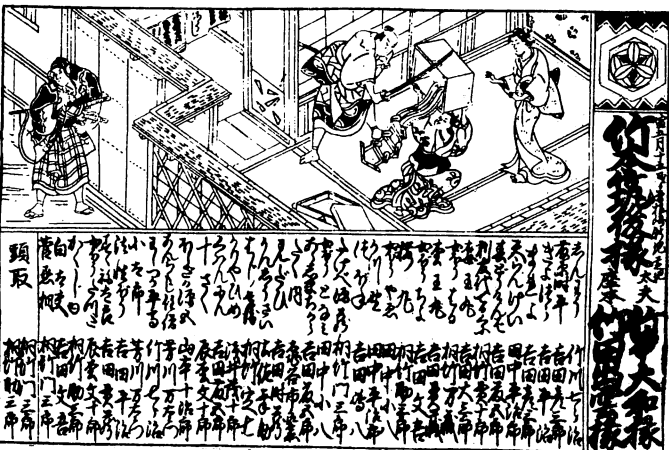
机の数が一脚多い。その怪は何所に在るぞと。見咎められて戸浪ははつと。調イヤこりや今日始めて寺イヤ寺参りした子がござんす。なに馬鹿な。ヲ、それく。これが則ち菅秀才のお机文庫と。地木地を隠した發机、フシざつとさばいていひ抜ける。調何にもせよ隙とらすが油断の元と。地玄番諸共突立ち上ることなは手詰。命の瀬戸際。奥にはばつたり首討つ音。はつと女房胸を抱き、フシ踏込む足もけしとむ内。地武部源藏白臺に首桶乗せてしつゝ出で。目通りに差置き。調是非に及ばず菅秀才の御首討ち奉る。いはは大切な御首。(いはは大切なお首十行)性根をすゑてサア松王丸。しつかりと檢分せよと。地忍びの鋤元くつろげて。虚といはば切付けん實といはば助けんと、フシ堅唾を呑んで扣へゐる。調ハ、ハ、ハ、何のこれしきに性根どころか。今淨玻璃の

鏡にかけ。鐵札か金札か地獄極樂の境。家來衆。源藏夫婦を取巻きめされ。地畏つたと捕手の人数十手振つて立ちかゝる。女房戸浪も身を固め夫は元より一生懸命。サア實檢せよ檢分といふ一言も命がけ。後は捕手向うは曲者玄番は始終眼を配り。こゝろ絶體絶命と思ふ内早や首桶引寄せ。蓋引明けた首は小太郎。賢といふたら一討と早や抜きかける戸浪は祈願。天道様佛神様憐み給へと女の念力。眼力光らす松王がためつすがめつ窺ひ見て。調ムウこりや菅秀才の首討つたは。紛ひなし相違なしと、地いふにも悔り源藏夫婦。フシ傍きよろく見合せり。地檢使の玄番は檢分の詞證據に出かしたくよく討つた。調褒美にはかくまうた料敵してくれる。イザ松王丸片時も早く時平公へお目にかけん。いかさま隙取つてはお咎もいかど。拙者はこれよりお暇賜はり病

氣保養致したし。ヲ、役目は濟んだ地勝手にせよと首請取り。玄番は館へ松王はフシ桶にゆられて立歸る。地夫婦は門の戸ひつしやりしめ。物も得いはず背息吐息。五色の息を一時にフシほつと。吹出すばかりなり。地胸撫でおろし源藏は天を拜し地を拜し。調ハア、有難や忝や。凡人ならぬ我が君の御聖徳が顯はれて。松王めが眼がかすみ若君と見定めて歸つたは。地天成不思議のなす所。御壽命は萬々年悦べ女房。調イヤもうく大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王めが眼の玉へ菅丞相様が入つてござつたか。但し首が黄金佛ではなかつたか。似たというても瓦と金。寶の花の御運開きとあんまり嬉しうて涙がこぼれる。地ハア、有難や尊やとフシ悦びいさむ折柄に。地小太郎が母いさきて。迎ひと見えて門の戸叩き。調寺入の子の母でござんす。今漸う歸りました

と。地いふ聲聞くより又悔り。一つ遁れ  
て又一つこりやマア何とどうせうと。妻  
が騒げば夫は嗣す。調コリヤ最前言う  
たは爰の事。地若君には替へられぬ狼狽  
者めと戸浪を引退け。フン門の戸ぐわら  
りと引明くれば女は會釋し。調これはま  
あくお師匠様でござりますか。恐さを  
お頼み申します。地何處に居やるぞお邪  
魔であらにと。いふを幸ひ。調イヤ奥に子  
供と遊んで居ます。地連立つて歸られよ  
と眞顔でいへば。調ヲ、そんなら連れて  
歸りましょと。地すつと通るを後より只  
一討と切付くる。女もしれものひつばづ  
し逃げても逃がさぬ源藏が。刃するどに  
切付くるをわが子の文庫ではつしと請け  
とめ。調コレ待た待たんせこりやどう  
ぢやと。地撥ねる刃も容赦なく又切付く  
る文庫は二つ。中よりばらりと經帷子。  
南無阿彌陀佛の六字の幡額はれ出でしは

コハいかにと。不思議の思  
ひに觸も鈍リッ進み兼ね  
て見えにける。地小太郎  
が母涙ながら。調若君音秀  
才のお身がはり。お役に立  
てて下さつたか。地まだか  
様子が聞きたいといふに悔  
り。向シテそれは得心  
か。得心なりやこそ。この  
經帷子六字の幡。ムウして  
其許は何人の御内證と。  
尋ぬる内に門口より。調梅  
は飛び。櫻はかるゝ世の中  
に。何とて松のつれなかる  
らん。女房悦べ悴はお役に  
立つたぞと。地聞くよりわ  
つとせき上げてスエテ前後。  
不覺に取亂す。地ヤア未練  
者めと呵りつけ。すつと通



附書の日興の目度二座本竹月五年八層實[辰小寺]

るは松王丸。見るに夫婦は二度悔り。夢か現か夫婦かとフシ呆れて。詞もなかりしが。武部源藏成儀を正し。一禮は先づ後の事。是迄敵と思ひし松王打つて變つた所存は如何に訝しさと尋ねれば。ヲ、御不審尤も。存知の通り我々兄弟三人は。錦々に別れて奉公。情なや此松王は。時平公に隨ひ。親兄弟とも肉縁切り。御恩請けた丞相様へ敵對。主命とはいひながら皆これ此身の因果。何とぞ主従の縁切らんと。作病纏へ暇の願ひ。菅秀才の首見たらば暇やらんと今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい。なれども身がはりに立つべき一子なくば如何せん。爰ぞ御恩報する時と。女房千代と云合せ。二人の中の悴をば。先へ廻してこの身がはり。調机の敷を改めしも。わが子は來たかと心の著。菅丞相にはわが性根を見込み給ひ。何とて松のつれなからうぞ

との御歌を松はつれないくと。世上の口にかゝる悔しさ。推量あれ源藏殿。悴がなくていつまでも。人でなしといはれんに。持つべきものは子なるぞやと。いふに女房猶せき上げ。草葉の陰で小太郎が聞いて嬉しう思ひましょ。即持つべきものは子なるとはあの子が爲によい手向。思へば最前別れた時。いつにない跡追うたを。呵つた時の其悲しさ。冥途の旅へ寺入と早蟲が知らせたか。隣村へ行くというて。道まで往んで見たれども。子を殺さしにおこして置いて。どうマア家へ往なるゝものぞ。死顔なりとも今一度見たさに未練と。笑うて下さんすな。包みし祝儀はあの子が香囊。四十九日の蒸物まで持つて寺入さすといふ。悲しい事が世にあらうか育ちも生れも賤しくば。殺す心もあるまいに。死ぬる子は眉目よしと美しう生れたが。可愛やその

身の不仕合せ。何の因果に抱病迄。しまうた事ぢやとせき上げてかつばと。フシ伏して泣きければ。共に悲しむ戸浪は立寄り。最前にナ。連合の身代りと思ひついた傍へ往て。お師匠様今から願ひ上げますと。いうた時の事思ひ出せば。他人の私さへ骨身が碎ける。親御の身ではお道理と涙添ゆればイ。これ御内證。コリヤ女房も何でほえる。覺悟した御身代り。内で存分ほえたでないか。御夫婦の手前もある。イヤなに源藏殿。申付けてはおこしたれども。定めて最期の節。未練な死を致したで御座らう。イヤ若君菅秀才の御身がはりと云開かしたれば。漱う首さし延べ。アノ逃げ隠れも致さずにナ。につこりと笑うて。ム、ム、ム、(ハ、ハ、ハ、ハ、十行本) 出かしをりました。利口な奴立派な奴。熱氣な八つや九つで親に代つて恩おくり。お役に

立つは孝行者手柄者と思ふから。思ひ出  
すは櫻丸。御恩も送らず先だちし嘸や草  
葉の陰よりも。羨しかるけなりかる。悴  
が事を思ふに付け思ひ出さるゝと。

流石同腹同姓を、エ忘れ兼ねたる悲歎の  
涙、因なうその伯父御に小太郎が。間違ひ  
ますわいのと取付いて、エわつとばかり  
に泣き沈む。歎きも漏れて菅秀才一間の  
内より立出で給ひ。我に代ると知るなら  
ば此悲しみはさすまいに。可愛の者やと  
御袖をしぼり給へば夫婦ははつと。共に  
浸するフシ有難涙。地序ながら若君様へ  
御土産と松王つつ立ち。申付けた用意の  
乗物。早く〜と呼ばはるにぞ。ハツと  
答へて家來共、フシ御目通りに昇握ゆる。  
地早や御出でと戸を開けば菅丞相の御臺  
所。ナウ母様かわが子かと御親子不思議  
の御對面。源藏夫婦横手を打ち。四方々  
と御行方尋ねしに。何處にか御座なされ

し。サレバ〜。北嵯峨の御隠家。時平の  
家來が聞き出し召捕りに向ふと聞き。某  
山伏の姿となり危い所奪取つたり。地急  
き河内の國へ御供なされ。姫君にも御對  
面コリヤ〜女房。因小太郎が死骸あの  
乗物へ移し入れ。野邊の送り營まん。地  
アイと返事のそのうちに戸浪が心得抱い  
て来る。死骸を網代の乗物へ。乗せて夫  
婦が上着を取れば。哀れや内より覺悟の  
用意。フシ下に白無垢麻上下。地心を察  
して源藏夫婦。野邊の送りに親の身で子  
を送る法はなし。地我々夫婦が代らんと  
立寄れば松王丸。因イヤ〜これはわが  
子にあらず。菅秀才の亡骸を御供申す。

地いづれもは門火〜と門火を。フシ頼  
み頼まる。地御臺若君諸共にしやくり  
上げたる御涙。冥土の旅へ寺入の。師匠  
は彌陀佛釋迦牟尼佛。六道能化の弟子に  
なり賽の川原で砂手本。いろは書く子を

あへなくも。ちりぬる命。フシ是非もな  
や。あす夜たれか添乳せん。らむ憂目見  
る親心。合劍と死出のやまけこえ。あ  
さき夢見し心地して跡は。門火にえひも  
せず。京は故郷と立別れ鳥邊野。さして  
連れ歸る。

## 第五

地雲井長閑き大内山はや立ちかはる水無  
月下旬。日毎々々に時違へず電光雷火霹  
靂。打破いての天變只事ならず。玉躰安  
全雷除の加持あらんと勅使三度の召に應  
じ。地法性坊の阿闍梨參内あり。紫宸殿に  
壇を構へ幣帛押立て。獨鉈三鉈鈴錫杖ふ  
り立て〜祈らる。フシ擁護も嘸と知  
られける。地寛平法皇の御使として判官  
輝國。齋世親王屋姫菅秀才を伴ひ御階  
のもとにフシ伺候する。因僧正壇より下  
り給ひよくこそ參内ましまして。地親



王の御手を取り上座に移し参らすれば。輝國階下に頭をさげ。因豫て法皇貴僧に談じ給ひし通り菅秀才に菅原の家相續。天機宜しき次手を以て御沙汰あつて給はりしか。承はつて参れとの使さふと述べければ。親王も僧正に向はせ給ひ。此度の天變察する所。無實の罪に沈んだる菅丞相の所爲なるべし。この靈魂を鎮めんには法皇の仰せの如く。菅秀才が勅勅を赦され。菅家再び取立て給はば亡魂も恨みを晴らし。天下萬民の悦びこれにしかじ偏へに貴僧を頼み入る。次には魔が虚命の逆鱗。申し晴らして給はれとスエテ事叮嚀に述べ給へば。仰せの如く菅丞相恨みは晴れぬ天變不順。愚僧元より菅丞相とは師弟の中。靈魂の怒りをやするむる菅原の家相續。宜しく奏し奉らん法皇御所へも此通り。輝國申上げらるべし。各は此方へと。打連れ奥に入り給へば

判官代大きに悦び。僧正の御請合法皇に申上げ。追付け参上仕らんとッ心いそ々立歸る。齋世親王菅家の兄弟密に参内致せしと。春藤玄番が知らせによつて。時平の大臣大きに驚き。希世清行前後に隨へ逸散に駈來り。寢殿遙に窺ひ見れば。實にも玄番が申すに違はず。時平が怒となる奴ばら片端し打殺し。天皇法皇遠島させ我萬乗の位に即かん。希世ぬかるなと八方へ眼を配り。事を窺ひ待つとも知らず。判官代は歸りしかと。奥より出づる菅秀才ソレと時平が掛聲に。左中辨つと寄り小腕取つて捻伏せたり。時平の大臣から〜と打笑ひ。蠅同然の小悴なれども生け置いては後日の仇。首討つたると思ひしに小ざかしくも我を謀り。今日まで存命せしは松王めが計ひよな。賢首喰うたうつそりめと。春藤玄番が肩骨つかみ不忠油断の見せ

しめと。首引抜いてかしこへ投捨て。ヤア〜兩人。此小悴は臈に任せ。齋世親王刈屋姫立て参れと下知するにぞ。清行希世心得しと奥をさして行く所に。俄に晴天かき曇りコッ風雨發つて絶間なく電光虚空に閃めき渡り。天地も崩る〜大雷ばち〜二人はがち〜胸ぶるひ色青ざめて逃げ惑ふ。時平の大臣はびくともせず。ヤア臈病な腰拔共。鳴れば鳴れ落ちは落ちよ。雷神雷火も足下に向け。み消してくれんすものと菅秀才を小脇に搥込み。虚空を睨んで突立つたり。猶もはためく震動雷電希世は生きたる心地なく。御階の下に屈みある頭の上に車輪の火の玉。落つると見えしが左中辨五體炎に燃え爛れ。天罰目の前師匠の罰ッ心地よかりし最期なり。これにも屈せぬ強氣の時平。三善の清行いづくにある

鷹に敵する雷神なし。怖くば爰へ來れよと。嗚呼ぶを力に立寄る清行。あはやと三善も雷火に打たれ、フシ即時に息は絶え果てたり。二人が最期にさしもの時平。心應して膝わなく、擔にしたる首秀才ナリ逃げて。へ行方も知らばこそ。此上頼むは法力と壇上に駈上り。兩手を覆うて踏る。左右の耳より尺餘の小蛇。顯はれ出づれば閃絶しうんとにつけにフシ反りかへれば。二疋の小蛇は拔出で壇に立つたる幣帛に。入るよと見えしが忽ちに。此世を去りし櫻丸夫婦が姿と顯はれ出で。影の如く壇上にすつくと立ち。骸骸腹立ちや恨めしや。汝故に菅丞相。無實の罪に浮き沈み。心筑紫に果てナラス給ふ。ヌエ其怨念は。フシ晴れやらぬ。ハルフシ空に轟き。鳴神の姿變じて紅と。櫻共に散らさん來れや來れとハメミ頭を。掴んでフシ引立つる。嗚音に驚き法性

坊紫宸殿に駈出でて見給へば。物の怪の姿あり。フシ有明櫻。佛祈加持して退けんずものと。珠數さら。押揉んで。千手の陀羅尼くりかけ。佛祈し祈れば時平は夢とも現とも。思はず知らず立上れど櫻夫婦が妄執の。靈霧に隔てられフシ形は。見えて手に取られず。フシ逃げんとするを。逃がさじと向ふにたちまち八重一重。双にかゝりこの世を去り。骸骸は終に呵責の火櫻。此身を焦すフシ靈龜櫻。圓いかに僧正祈るとも。此怨念は何時迄も。付き纏はつて糸櫻。サハリ退かじ放れじ幻は。打てども去らぬ大櫻。コハ、死靈を去らさで置くべきかと。採みかけ。佛祈し給へば夫婦が靈魂。イヤ。いか程祈るとも。我々諸共冥途の苦思見すべしと寄れば。佛祈し。祈れば二人形は見えつ隠れつ九重の。彼岸櫻とちり。佛に僧正の珠數先へ。フシ恐れて寄らぬぞ不思議なる。紫宸殿に佛正あれば。弘徽殿に夫婦の姿。弘徽殿に移り給へば。清涼殿に死靈の形。清涼殿に移り給へば。梨壺。梅壺。夜の御殿室の御座。行速ひ行廻り。祈るは僧正去らぬは怨靈揉合ひ。ナホス祈り伏せられ櫻丸。ヤア。僧正。菅丞相を譏言し。帝位を奪ふ時平を助け給ふは心得ず。扱は貴僧も朝敵に力を添へ給ふかと。聞くより僧正大きに驚き。ヤアかゝる天下の仇とも知らで。珠數を穢せし勿體なやとフシ法座を立去り入り給へば。時平も恐れ諸共に御座の間さして逃入るを。響を取つて引戻し。今こそは思ひの儘。冥途の闇路に伴はんと。櫻の枝の笞を振上げ追立て。追廻し笞を持つてちやうの骸。打たれてうつ。空蟬のフシ脱平を庭上に。どうど蹴落し嬉しげに。形

は花の散ることく。消えて見えねば丞相の靈もしづまり空晴れてツシ日輪。光り輝けり。地かくと見るより菅秀才刈屋姫庭上に走り出で。舅父上の敵通さじと用意の懐劍抜き放し。恨みの刀思ひ知れと。地刺し通し〜悦び給ふツシ折こそ

柱。瑪瑙の梁瑠璃の垂木。廻廊拜殿あり〜と拜まれさせ給ひける。京に北野難波に天満神徳奇瑞並びなく。榮えましますこの御神縁起をあら〜書き残す筆の冥加や御傳授の。傳はる和國にいちじるき威徳を。崇め奉る

あれ。地官御夫婦若君の安否いかゞと松

王丸。輝國伴ひ参内すれば。白大夫梅王

も幸府より立歸り御階の下に伺候して。

櫻丸夫婦が怨念時平が悪事を顯はせし仔細を聞くより人々喜悅。共に悦び法相坊

親王を伴ひ立出で給ひ。同人々の願ひの

如く。菅秀才には菅原の遺跡を立てさせ。菅丞相に正一位の贈官あり。右近の

馬場に社を築き。南無天満大自在天神と

崇め。地皇居の守護神たるべしとの宣旨

なりと述べ給へば。皆一同に悦びをきく

に北野の千本松。榮え榮ゆる御社は千年

萬年朽ちせぬコハリ宮殿。錦の帳。瑠璃の

延享三年寅八月廿一日

作者連名

並木千柳  
三好松洛  
竹田小出雲